

Presented by Stardust Books



創星

Vol. 6

Take Free

*短歌十首 ばあちゃん

ばあちゃんが泣いていたんだオオカミの姿の頃に戻りたいって

ばあちゃんは赤い毛糸の帽子から光や闇を取り出してみた

歩道橋 光と闇を飛び越えたス・ピ・イ・ド・お・と・せ眩きながら

笑うのも泣くのも同じ顔をしてばあちゃん星のワルツを踊る

ばあちゃんの宿題は何？夏の夜花火をひとつ摘んで食べる

がんばれと言わなくていいがんばれない白菜同じ形に刻む

パソコンが落ちる速度に類似して触らないでいたらばあちゃん

家出したばあちゃんどこかでぐっすりとクリームパンの夢とか見てる

洒落た帽子をかぶってねえいない人いる人みたいに語るばあちゃん

あいたいと文字を書いたらあいたいと真似て隣に書かれた手紙

鏡に恋が映っていたので、

ババタカオ

都内のワンルームマンション。

そこを自宅兼、仕事場に行っている小泉ナコは、今年30になる女流漫画家である。遅咲きのデビューを果たし、次なる作品で連載のチャンスをつかもうと思っていた。

ペンは驚くほど乗っている。

漫画を描き始めたころは、自分が好きなようにかけていたのに、投稿し、編集部目に止まり、担当編集者が付くと、雑誌の色や、読者のニーズなどを考えねばならず、気が付けば漫画を描くのが苦痛になっていた。

そして、生活に押され、漫画から遠い生活をしばらく続けてきた。

しかし、年を重ねていくにつれ、自分を取り囲む環境は変わっていく。

同級生だったYちゃんは結婚し、同期入社の子ちゃんは退職して、雑貨屋を始めた。

急に自分が置いてけぼりを喰らったような気がした。

その想いは、日に日に増していき、ある日、テレビを見ながら安い発泡酒を飲んでいる時に、「漫画を描こう」と思い立った。

少年が、衝動のままに暴れ、活躍するマンガだった。

ナコはそれを片手に、出版社に持ち込みをしたが、結果は芳しくなく、ようやくKと言う出版社で、遠藤と言う若い編集者と出会った。

遠藤慎一と書かれた名刺を差し出し、「頑張って、連載を獲りましょう」と挨拶した彼の笑顔に、ナコはやられてしまった。

ナコはおよそ男とは無縁の世界で生きてきた。

極端に自分に自信がなく、いつも妄想の中で過ごしてきた。漫画と言うメディアは、自分に合っているのだろうが、その為に、自分のコンプレックスを無視し、或いは許容して、ごまかせてきたのかもしれない。

そうして今、遠藤と言う担当編集者を前にして、ナコは恋を思い出したのだ。

新作のネーム（※コマ割り、構図、セリフなどを大まかに表したもの）を描いていくナコは、喜々としている。

表情をとるために机に置いている鏡は、ナコの心象を投影する。

その表情を、キャラクターに反映させる。

主人公の少女が、恋に頬を赤らめている。

自分で描いたキャラクターの表情に、悦に入るナコは、明日の打ち合わせを心待ちにしている

。

編集部に近い喫茶店。

午前中の静かな店内。

窓際の4人席にナコと遠藤が向かい合わせで座っている。

遠藤は、ナコの持って来たネームを素早く見て行く。

遠藤が見ている間、ナコは俯いて黙っている。時々コーヒーを口にするが、読まれている間は緊張して仕方がない。

しばらくして、遠藤がネームを読み終え、その紙の束をそろえながら「小泉さんね……」と、切り出す。

「はい！」とナコは、条件反射のように反応する。

しかし、ナコから見る遠藤の表情は、さえない。

「これ、面白いですか？」と、遠藤がナコの目をとらえて言う。

「……面白くないですか？」と伏し目がちに、ナコは質問で返す。

「うちは、少年漫画なんです。女の子が主人公の恋愛ものは、うちのジャンルじゃないですよ」

「でも、今、少年漫画でもそう言うの、増えてるじゃないですか」

「それでも、小泉さんに求めているのは、そういうものじゃありません」

がっかりとうなだれるナコに、遠藤は励ますように言う。

「前作の、主人公のはつらつとした感じ！

それでいて、心理描写も見事でした。

「昨今稀に見る、王道の少年漫画を見た気がしました」

「ですから、今度は女の子で……」

「ええ、まあ、よく描けてると思いますよ？ でも、うちは少年誌ですから」

「そうですか。……そうですよね……」

「次は、ぜひ、その辺を意識してみてください」そう言って、遠藤は席を立った。

うな垂れるナコに、遠藤は続けて、

「それにしても、今日は随分とオシャレですね。どこか行かれるんですか？」と声をかけた。

ナコは嬉しそうに顔を上げると、さらに遠藤は続けた。

「もしかしたら、少女漫画とかの方があっているのかもしれないね」

そのまま店を出て行く遠藤の後ろ姿を見ながら、ナコは胸が苦しかった。

「そんな、私を遠ざけるような事、言わないでくださいよ」と、そう言いたかった。

ナコの作品は、主人公が少年に変わった。ナコは、鏡を見ては、少年に表情を付ける。

ひどく、寂しげである。

「こんな顔……」と、つい一人ごちてしまう。

こんなさびしい顔のキャラを描きたいわけではない。

「僕の気持ちを、君は分かってくれない……」と、こんなセリフを言わせたいわけではない。

遠藤が新しいネームを読んでいる。

雑誌の服を、まねてコーディネートしたナコは、俯いて、遠藤が読み終わるのを待っている。

この間と同じカフェ。この間と同じ席。

遠藤の手が、ふと止まる。

あるシーンに、目を奪われている。

「よく、描けています」と、ネームに目を落としたまま、遠藤はしゃべり始める。

「主人公の、好きと言う気持ちを、どうしても伝えられない切なさ、もどかしさがよく伝わってきます」

「じゃあ……！」と顔を上げるナコ。

「でも、うちでは扱えません。展開があまりにもロマンチックで、少年漫画では扱えませんよ」

「そんな……」

「何なら、少女漫画の編集部を紹介しますよ。そちらの方が肌に合うんじゃないかな」

遠藤のビジネスライクな話し方は、ナコにはものすごく冷たく聞こえる。

ナコは、悲しくなり、涙が出てくる。その様子を見て、遠藤が話しかける。

「小泉さん？」

「なんで、そんな事言うんですかあ……」

ナコの涙声が、遠藤を困惑させる。

「はじめて、原稿よんでくれた時、あんなに面白い面白って言ってくれたのに……！ どうして、こんなに私をいじめめるんですかあ」

「それは、素直に面白いと思ったからです」

「わたし、……色んなところに持ち込みして、初めて褒めてくれたのが、遠藤さんだったんです。……漫画で30歳ってどうなんですかね？」

とにかく、後がないように思えて、そんな時に遠藤さんに助けてもらったんです。

なのに……、私をよそに売るような事、言わないでください」

「……とりあえず、泣き止んでください」と、遠藤はハンカチを差し出し、ふと先ほどのネームに目を落とす。

気持ちを伝えられない主人公。

心の中で、相手を想い続けている。

「もしかして、これは僕に対する……？」

顔を俯けたまま、ナコは顔を上げられない。

涙でにじんだ、自分の膝しか見えない中、遠藤の声だけが耳に突き刺さる。

「ばからしい！」

ナコの書いたネームがばらまかれ、足元に落ちる。

宙を舞い、地に落ちて行く想い。

ナコは、なす術なく。

「漫画は、読者に向かって描くものです。ラブターじゃない！」

遠藤の声が、ナコの胸に突き刺さる。

「ふざけてます！ 漫画をなめてる！」

すべてを否定された気分だ。

自暴自棄。

発泡酒を飲みながら、机の上の鏡に目をやる。

泣き腫らし、感情の消えた顔が写っている。

「こんな顔だっけ」

鏡の傍らには、遠藤がばらまいたネームが汚れたまま、置かれている。

こんな原稿を、何を後生大事に取っているのか。見ていると、バカらしくなってきた。

ナコは、原稿を破り捨てる。

自分を、こんな顔にした、遠藤に対する思いさえ、吹っ切るかのごとく！

一息に、破くと、とても気持ちのいい音がする。

破れたネームの散乱する部屋で、ナコは飲みかけの発泡酒を、一気に飲み干す。

顔を洗い、鏡を見る。

自分は何のために漫画を描いているのかと、問いかける。

自分のうじうじした気持ちをぶつける為じゃない。

書きたい漫画があったんだ。

みんなが元気になるような。

読んだ人たちが、わくわくするような、面白い漫画を、描きたいと思ってこの歳になっても、また挑戦してるんじゃないのか。

慌ただしい編集部に、ナコがやってきた。

化粧もしておらず、服装も野暮ったい。

しかし、その鬼気迫る雰囲気、広い編集部全体が何かを感じたようだった。

「小泉さん！」

遠藤が駆け寄る。

挨拶もなしに、ナコは新しいネームを渡す。

「坊主頭に吹く風」と題された、熱血高校生の物語。

遠藤は、読んでいくうちに、その世界に引き込まれる。

「面白いです！　すぐ、原稿に起こして下さい！　やるじゃないですか！」

ナコ、満足そうに頭を下げる。

「ありがとうございます」

「その顔……」

「あ！　すいません。鏡も見ずに、急いだものだから……！」

慌てるナコに、遠藤は「いい顔してますよ。作家の顔だ」と声をかけた。

思いがけないひと言に、ナコは思わず頭を掻き「えへへ……」とマンガのように照れる。

「『えへへ』ですか」と遠藤が笑いだす。

慌ただしい編集部の中で、優しい時間が二人を包んだ。

ライス

詠人不知（よみびとしらず）

犯人は脇園だった…。

浅野、伊藤、牛尾、江口、小田、片岡さん、菊川、工藤、ケリー、小島、坂本、清水、鈴木、瀬戸、園田、田中、超、鶴、手嶋、戸田、長江君、西田、ぬらりひょん、猫、野田、橋本、樋口、藤井、ヘンダーソン、本多、前原、三池、武蔵野、メソッドマン、毛利、矢沢、湯川、吉村、ラマ、ライス、ルイス、レイス、ロイズ、脇園、ををを～んんん～！！

デデデっデデデっ…デーレーえええ！！

トリックは巧妙にして微妙、大胆かつ繊細、器用なようで不器用、男のようで女、早朝のようで夕方だ。

朝陽なのか夕陽なのか、寝ぼけ眼でデジタル時計を見れば5時ジャスト。

ライスライス逆さだぜ、ライス！！

きゆるきゆるきゆるきゆる～。

【第一章 浅野】

浅野朝夫はいつも朝顔とにらめっこしていた。

つづく！？

三日月ハーフパイプ

しなおかななし

A dream is a wish your heart makes
When you're fast asleep
In dreams you lose your heartaches
Whatever you wish for, you keep
Have faith in your dreams and someday
Your rainbow will come smiling thru
No matter how your heart is grieving
If you keep on believing,
The dream that you wish will come true

口ずさむのは向こうが大好きだという物語の一つの、ガラスの靴の話の挿入歌。濃紺のプリーツスカートと白いブラウス。病院の一室で、足元に靴を転がして、学校の制服のまま、スカートの裾と後ろでしばった髪を揺らし、映画に出てくる王子様の台詞を堂々と謳い上げる。

お嬢さん。もしよろしければ、わたしと踊ってくれませんか？

そう言うやうやく手を差し出すと、ベッドの上でシーツにしわを作りながら、お姫さまがぱたぱたとパジャマの袖を振る。

すごい。おねえちゃん、ほんとうの王子さまみたい。

ぱちぱちと手を叩く妹に、大きく一礼して歩み寄る。

一生懸命練習したんだよ。あいに喜んでもらえるように。少しでも楽しんでもらえた？

くしゃくしゃと頭をなでながら、すとんと隣に腰を下ろすと、小さな顔がうれしそうに笑う。

うん、すごくかっこよかった。

ほんとう？冗談じゃなくて？

うん、と元気に頷かれて、思わず隣の白い頬に、身体をぎゅうっとすり寄せる。

やくそくだよ。大きくなったら、おねえちゃんと結婚する。おねえちゃんのお姫さまになって、ずっとずっと、そばにいるね。

それはいつかの遠い記憶。

思い出すこともできないくらい昔の、なにより大事で大切だった、かなわなかったちいさな夢

。

じゃがいも。にんじん。セロリ。かぶ。白菜。しいたけ。エリンギ。えのき。ほうれん草を賽の目に刻み、細かく切った玉ねぎを炒める鍋に投入する。じゃがいもだけは皮を剥き、後は皮を剥かないまま。火が通りにくい順に入れ、まずはじゃがいもとにんじんを炒める傍ら、子供用の包丁でセロリを刻む姿を視界に入れる。

「そんなにあせんなくていいぞ。セロリはどうせすぐ火通るし」

それより、ケガされるほうが危ない。そう言いながらセロリを受け取り、今度はかぶを渡す。しいたけはさっき切ってもらったから、それと同じようにと告げた。

「皮はむかなくていいの？」

「ああ。そこに栄養が詰まってるから。ちょっとかたいかもしれないけど、もう半分に割ってあるから、こうして上からぐっと押して、半分に切れたらそれでいい。大変だったら他のにする？」

「うん。やれる」

小さく首を横に振り、まっすぐまな板の上のかぶに包丁を下ろし始めた様子を見届け、また改めて鍋に向かう。指だけは切らないように。それだけ再度釘を差し、横目でほんの少しだけ端のテーブルを視界に留める。

卵と乳製品アレルギーのユウタにとって、食べられる食事は限られている。オムライスとかぼちゃとじゃがいものパンケーキ、シチューはルウから手作りのものしか食べられないし、パンやケーキもアレルギー対応のものを扱っている店からしか買えない。

成長によって改善することもあるし、ものによって程度の差もあるとはいえ、僅かな量でも比較的敏感に反応するこの子は、将来自炊ができないと確実に困るし、たぶん生きていきづらい。

あまり簡単なことばかり教えても、本人のためにならないから。もし、なにか教えるなら、ちゃんと教えてあげなさい。

正しいことも、間違ったことも、簡単なことも、難しいことも、すべて等しく教えろと、そう告げられた優しい人の穏やかな笑顔を思い出し、自分より遥かに小さな手が刃物をしっかり握り締め、固い野菜を割ってゆく、真剣な表情を見つめた。

固いものを切るのは難しいけど、それをちゃんと練習できたら、料理できるものが増える。たとえ火は使えなくても、果物を切って芯を取ったり、サラダを作ったり、下ごしらえをできるようになる。

この子が一人で台所に立てるようになるまで、あとどれぐらい月日がかかるかわからない。けど、少なくとも、その日まで、教えられることは教えたかった。

ぶつ切りにされたセロリの茎としいたけとエリンギ、白菜を鍋に放り込み、全体が馴染んできたところで、ほうれん草を加えるのと同時に、テーブルから突然歓声が聞こえた。

「できたよ」

「お、どれどれ……うん、OK。ユウタ、うまくなった」

「ほんとう？」

「ああ、ほんと。じゃあ、これ、炒めるから。そっちのエノキ、ほぐしてくれる？」

「うん！」

嬉々としてかぶが入ったボウルを渡し、ざくりと短く切られただけのえのきの束をばらばらと手でほぐしながら、満面の笑みを浮かべる小さな姿を見下ろした。

———おねえちゃん。ほら、できた。

白く細い、脆い指。掴めば折れてしまいそうな肉も色も薄い手で、不格好に描かれた絵を誇らしげにこちらに掲げていた、遠い、眩い笑顔を思い出す。

「おねえちゃん？」

「……なんでもない。ほら。できたら、それ、ちょうだい」

はい、と大人しく頷き、ばらばらにほぐされたえのきを恭しく持ってきたユウタの頭をくしゃ

くしゃと撫でる。よくできたな、と褒め、最後の具材を鍋に投入すると、それを楽しそうに見つめながら、ユウタが嬉しそうに笑う。見せてとせがむその身体を、しっかりと抱いて持ち上げる。

「ほら、こんなところ。あともう少ししたらできあがるから、それまで手でも洗っていな。コップとお箸、並べてくれたら、後はこっちでやれるから」

「えー。お皿、並べたい」

「スープは熱いから、ちょっと駄目。今度熱くないお椀買ってきたら、その時は運ぶの手伝って。その代わりに、お茶碗運ぶ時は、よろしく」

ぐつぐつとたぎる野菜の鍋を二人で見つめて、そっとその身体を下ろす。鍋に落とし蓋を落とすのと同時に洗面所へと駆け出す背中を見送り、こんな時間があとどれぐらい穏やかに続いてくれるのか、そんなことを考えそうになる己に黙って蓋をした。

炊飯器のタイマーが鳴ると同時に、ベルの音が響き渡る。

「はい」

生返事を浮かべながら玄関に向かうと、おう、こんちは、と声がある。洗面所から飛び出してきたユウタの顔が輝くのと反対に、自分の顔がものすごい速さでしかめられるのがよくわかった。

「帰れ。何がこんちはだよ」

「冷てえなあ。せっかくみやげ持ってきたのに」

「うるさい。だからなんなんだよ。みやげだけ置いてとっとと帰れ」

「うわ、ひど。お前、それが人の言う台詞か？」

「やかましい。大体、なんで飯時に来るんだよ。お前の分なんか用意してねえぞ。中に入って、指くわえて、人が飯食ってるそこ見てるのかよ？」

「昼飯は外で食べてきた……てか、言葉もう少し気遣えよ。別におれだけじゃったらええけど、ユウタの教育に悪いじゃろ」

半分呆れたような、もっともな言い草に、なんだか余計にかちんとする。このまま引っ込んでしまおうか。そう思い始めた瞬間、足元にユウタがまとわりつく。

「おねえちゃん。おにいちゃん、あけてあげて。おみやげ、もってきてくれたって」

脚にぎゅっと抱きつかれて、思わず引き離そうとして止まる。別にユウタに抱きつかれるのは嫌じゃないけど、人になにかを頼む時、じっと見上げるのはやめてほしい。つい、と視線をドアに逸らし、ほらよ、と鍵を開ける。

「さんきゅ、ユウタ。元気か？」

がちゃりと留め金が外れ、開いたドアから大きな身体が中へするりと滑り込むと、ほんの少し息の上だった人懐っこい顔が、熊みたいになっこり笑っていた。

「うん。おにいちゃん、こんにちは」

嬉しそうに巨体に飛びつき、よじ登ろうとするユウタを抱き上げ、グローブみたいに大きな手で頭をわしゃわしゃと撫で回しながら、招いていなかった客が笑う。永嶺剛士。通称、剛。草食に見える月の輪グマ。もしくはベジタリアンなヒグマ。ジャケットに包まれたもこもことした腕で軽々とユウタを抱えながら、剛がにと笑ってきた。

「おはよ。開けてくれて、ありがとうな」

なんの屈託もない、子供みたいな明るい顔。

「……言っとくけど。お茶以外、なんも出ないからな。それでもよかったら、早く上がれ」

それだけを言い残し、なんとなく見ていられなくなって、ふいと顔を背けながら、とっくに炊けた米とスープが湯気を立てている台所に、さっさと自分の足を運んだ。明るい笑顔が二つ揃って声を立てている玄関は、たとえ何度呼ばれても、自分の居場所じゃないような気がした。

「はい」

野菜スープとトマトの炊き込みご飯で作ったオムライス。じゃがいもとひき肉の重ね焼き。昼食を食べる自分達の隣でおかみさんからもらった玄米茶をすすりながら、剛はポケットを探り、中身をきれいにテーブルの上に並べた。

「・・・・・・・・なに、これ」

白地に淡い水色で半分染め抜きされた入場券。福岡と熊本の間にある大型遊園地の名前と、上から見た絵が印刷された、カラフルな紙切れを前にスプーンを持って固まった。

「遊園地のチケット。招待券二枚と、小学生未満の幼児無料の特別券一枚」

「いや。そりゃ、わかるけど・・・・・・・・お前、これ、どうしたんだよ」

「部のOBの先輩からもらった。この間、熊本からこっちに来てな。ここの医務室に勤めとるらしくて、もし欲しいやついたらやるぞーって言ったから。じゃあくれって言ってもらってきた」

「そんなあっさり手に入んのかよ」

「いや。家族持ちの先輩とかも、何人か中におったから。ちょっとばかしもめて、最終的にアミダくじで落ち着いた」

九州最大のアミューズメントパークで、一時のピークは過ぎたとはいえ、結構人気があるはずのそのチケットは、普段忙しく動き回っている医者や看護師の家族サービスにはもってこいだろう。医業合同で既婚者のメンバーも多いはずの野球部で、明らかに年若い学生の剛がそれをもぎ取ってきたことに、なんとなく眉を潜めてしまった。

「・・・・・・・・お前。ちゃんと、勝ったんだよな？」

「当たり前じゃろ」

じゃなきゃ、持ってこれるわけねえだろうが。呆れたような視線を向けられ、むっとする。

「んなこと、どうでもいいんだよ。なんでうちにこんなもん持ってきたんだよ」

「ああ。それ、お前達と行けないかと思ってな」

あっさりとなんな言葉を返し、急須から茶のお代わりを注ぐ剛の顔を呆れ返ったように見つめる。

「今度のゴールデンウィーク、休み取れんって言ってたじゃろ？いつもゴールデンウィークの間は殺人的に忙しくて、とても店を空けられないって、辰己さんがこぼしとった。早月さんも、沙也花ちゃん達も。毎年この時期はひっきりなしに客が店に詰めかけるから、いつも自分達の休みはその前か、うんと後に取るんだって」

おかげで彼女と満足にデートする時間もとれやしないと、恋人なんて生まれてこのかた一度もできたことなんかないくせに、そんなことをこぼしながらバイクのスパークプラグを外し、潤滑剤のスプレーノズルをホールの中に落っことしてシゲさんに後ろからどつかれていた定明の悲鳴を思い出す。そういえばあの時、確かに店の横に併設されたカフェで、親父さんと沙也花と一緒にコーヒーをすすっていたこいつの姿が脳裏に蘇り、妙に話が弾んでいると思ったらそんなことを話していたのかと、今更ながらに納得する。

「猛烈に忙しくなる前に、交代で休み取るんじゃろ？だったら、21日かどこか、一緒に遊びに行けんかと思って。ユウタ、遊園地行きたいって言ってたじゃろ」

「うん、行きたい。すっごく、行きたい！」

きらきらとした瞳でテーブルの上のチケットを見つめるユウタを、微笑ましそうに見守る剛の短く刈り込まれた頭を思いの限り引っぱたく。

「ってえ」

「馬鹿。どうしてお前が人の休みのこと決めたりしてんだよ。まだなんも申請してないんだぞ。しかも、なんでよりによって、お前とこんな遠いところにある遊園地行かなきゃいけないんだよ」

「お前、スペースワールドは行ったことあるって言うし、今改装中で乗れるもの少ないじゃろ？ここなら渋滞にさえ捕まらなけりゃ、都市高使って一時間で行けるし。子供向けの乗り物も結構あるっていうから、いいアイデアかと思ったんじゃが」

「遊園地はいいアイデアかもしないけど、どうして三人で行かなきゃいけないんだよ。お前とユウタが行けばいいだろ」

「せっかく三枚もらってなのに、なんで二枚だけ使わんとおえんのじゃ。お前、今、ユウタの保護者じゃろ」

「だから、人が多いところが苦手なんだよ。しかも、なんでお前と一緒になんだよ。どうせ賑やかにしたほうがいいなら、定明のほうがうるさいだろ」

「あいつ原付の免許以外持っとらんじゃろ。ユウタ乗っけて熊本までツーリングする気か？地下鉄とJRとバス乗り継いだら、片道二時間はかかるぞ」

しかもあいつ、絶対一人でお構いなしにはしゃぎ回るし。そう付け加えられ言葉に詰まる。自分とユウタそっちのけではしゃぎまわったり、嬉々としてお姉さんに声かけまくったり、あげくにはぐれてどこかに消える小柄で元気なお調子者の姿が、見えるように目に浮かぶ。

「おねえちゃん。行っちゃだめ？」

「別に、行くのは行っていいよ。ただ……」

一緒に行く必要はない。そう言おうとしたところで、ユウタの視線とぶつかり合う。

「ねえ、おねえちゃん。いっしょにいこう」

ぼく、ちゃんと、いい子にできるから。服の袖をユウタに掴まれ、じっと目の奥を覗かれる。ほんの少しずつ自分のことを主張するようになってきて、それでも普段、ほとんど我俣を言わない口が、小さくおずおずと言葉を紡いで自分に向かって向けられていた。

「……予定。確認してからなら」

親父さんやシゲさんがいつ休むか、まだ、なにも聞いていないから。そう呟いて目を逸らし、ユウタの腕をそっと剥がすと、きゃあ、とユウタが声を上げた。

やった。いっしょに、あそびにいける。

そんなふう嬉しそうに笑うユウタと、狭い部屋の隅を睨んで肘をついている自分を、剛が向かいで見つめている。なに、と不機嫌に尋ねると、いや、なんでも、と返され、どこか微笑んだようなその言葉に、腹の虫が収まらないまま、茶を喉の奥に流し込んだ。急に賑やかになった部屋のテーブルの、ずらりと並んだ皿の向こう。水彩画みたいな遊園地の絵が踊るように、きれいに並んだチケットが僅かに揺れてひらりと舞った。

「・・・・・・・・ったく。お前さあ、本当に、そんなにやることないの？」

昼食後の真昼の公園。春一番と呼ぶには早い、まだほんのり肌寒い風と、少し和らいだ陽射しの中。店で飼っている番犬のアルと、ユウタと一緒に散歩に出かけ、隣の熊に話しかけた。ベンチに並んで腰掛けながら、剛は遠くでボールを投げながらじゃれて遊んでいる二人を眺め、特に気を悪くした様子もなしに頷いた。

「暇ってわけじゃないけどな。別に、自由時間、おれがなにしようとして勝手じゃろ」

「そりゃ、そうだけどさ」

だからって、休みのほとんどを自分達と付き合う理由なんて、どこにも存在しないはずなのに。足繁く店に通い、バイクに興味があるわけでもないのに、自分や店主、職場の同僚と話し込み、奥で待っているユウタと遊び、仕事が終わるまでの間、沙也花や凜々花と相手をし、たまの休日を見つけては、大概なにか手土産か、変わった土産話を持って、こうして顔を見せにくる。

店に時折顔を出すのは、定明に連れられてやってきてから、もうすぐ二年目になるけれど、ここまで頻繁に会いにくるようになったのは、間違いなくユウタが来てからだ。

「彼女とかいないの。医学部の主席なら、なんかもてそうなもんだけど」

「そんなもんだだけの偏見じゃろ。別に主席でもなんでもない」

たいしておもしろくもなさそうに流すと、またユウタ達の方に視線を向ける。自分より二回りもでかいくせに、あまり威圧感を感じないのは、飲み物を口に運んでいるその姿が、蜂蜜を舐めている熊かなにかみたいにおっとりしているからだろう。愚鈍とも、無神経というのとも程遠いけれど、常に穏やかで揺らがない。雲のようにぷかぷかと浮いている、どこか泰平楽なその雰囲気、最終的には毒気を抜かれ、ほんの少しだけ、普段より、肩の力を抜きながら、どうでもいいことを話し合うのもいつものことだった。

「なに？」

「—————いや。だいぶ馴染んだなと思って」

遠くで遊ぶアルとユウタを眺めて、こっちに視線を移した剛がそんなことを呟いた。

「何日目じゃ？ユウタが家に来て。音沙汰。まだ、なんもないんじゃろ？」

「・・・・・・・・あぁ。警察からも、なんもない。元の幼稚園の先生とかは、時々様子見にくるけど」

それすら正直、決して多くはない。そのひとは告げなくても、十分相手に伝わったのか、剛は何も言わなかった。

ユウタが家に預けられてから、今日で三ヶ月が過ぎる。勤め先のオート店から地下鉄で二十分の百貨店。店主の娘と奥方に強引に買い物に付き合わされ、デパートの休憩スペースで、ピアノの発表会で着るといふ衣装を見に行った沙也花と凜々花、早月さんのことを待ちながら、手持ち無沙汰に席に座って、ぼんやり天井を見上げていると、突然、落ち着いた格好をした、見知らぬ女性に声をかけられた。

すいません。ほんの少しだけ、この子を見てもらえませんか。

綺麗な女の人だった。初対面の自分でも、声をかけられ振り向いた途端、思わず目を奪われるほど整った、けれどどこか地味で儂い、そんな印象を抱く、白くほっそりと痩せた、物静かな女性だった。

いきなり、どうしたんですか。唐突な言葉に事情を訊くと、女性は申し訳なさそうに、急に電話で仕事場に呼び出されてしまい、今すぐ行かなければいけなくなった、忘れ物を届けるだけだから、すぐに戻ってこられるけど、その間この子のことを見てもらえる人がどこにもいないのだと、何度も頭を下げてきた。

あまりのことに唖然とし、断ろうと立ち上がると、一月の寒空に薄い手袋と真っ白なコートを身に纏い、烏のように黒い髪を肩に下ろした女性に手を引かれ、青いダウンジャケットに身を包まれた小さな子供が、じっとこっちを見上げていた。

葡萄みたいに黒く小さい丸い瞳。男の子独特の細い指。きれいに整えられた髪と、白く幼い表情は、ほんの少しも逸らすことなく、こっちをじっと見つめていた。

笑うことも、泣くことも、なにかを訴えることもなく、自分のことを覗く顔。その目の前にあるものを、ただ受け入れようとする瞳。

遠い昔。そんな視線を見たことを、唐突に、ふと思い出し。とうに凍ったはずの胸の底が、ほんの少しだけ抉られた。必ず迎えに戻ってくると、たった一言約束させ、自分は見知らぬ彼女から、その小さな手を引き取った。

あの日から九十二日。未だに迎えを待つあの子と、自分は一緒に暮らしている。

「最初はびっくりしたけどな。お前が子供、預かってるって聞いた時」

今の自分の状況は、未成年者誘拐と勘違いされてもおかしくない。デパートの店員にも、警察にも通報したけど、あの日ユウタを預けられてから、あの女に関する情報は一切上がってこず、自動相談所に連れていくよう何度か説得もされたけど、そのたびに自分の服の裾を強く握ってうつむくユウタのことを、自分は手離せなかった。

「—————約束したら、しょうがねえだろ」

お母さんが迎えにくるまで、ユウタのことは自分が預かる。いつかきっと、迎えにくるから。だから、それまでうちにいろ。

警察官が帰った後、そう告げたら、それまでずっとがまんしてきたなにかをこぼすみたいに、目から涙をぼろぼろ流して、自分にしがみついていたユウタを、力いっぱい抱き締めた。お前は置いて行かれたんじゃないから。いつか必ず、迎えにくるから。誰にもわからないように、決して聞こえないように、声を押し殺して泣く小さな頭を、ずっと撫で続けた。

どこまでできるかわからないけど、あいつのこと、守ってやりたい。

永遠に預かれるわけではない子供の面倒を見る気かと尋ねられたとき、戸惑いながら返した答えを静かに聞いてくれたのは、隣に座っているこいつひとりだけだった。

「……………なに」

「いや。意外と、しっかりしとるなと思って」

「うっせえよ。どうせ柄でもないって、ほんとは笑ってるんだろ」

料理したり、看病したり。おかみさんの好意で勤め先に連れて行って、毎日ユウタの世話をする自分の姿を、シゲさんは笑わなかったけど、最初、定明や辰己さんがびっくりした表情で眺めていたことは知っている。ぐしゃぐしゃの頭で、化粧もしないで、いつも油か煙にまみれてバイクをいじっている自分が、まともに子供の面倒をみる姿など想像もしていなかったと如実に物語る、その表情を思い出す。

「別に、そっちは意外じゃないけどな」

なぜかどこか人の悪い笑みを浮かべながら、くつくつと自分を見下ろされ、どうしてか尋ねようとすると、ふい、と視線を逸らされた。

「……………お前がずっと隣にいと、煙草が吸えないんだよ」

わかっているのに、嫌がらせだろ。そう言外に目を尖らせ、じろりと横顔を睨みつけると、剣呑な視線もどこ吹く風と、手際よくプルトップを開けたカフェオレを一本手渡された。

「吸いたかったら、吸えばええじゃろ。別に吸うなって言ってないし」

「吸わない奴がいる時は、吸わないって決めているんだよ。だから早く帰れって、何回もそう言ってるのに」

「じゃあ、吸いたい時に吸え。おれは勝手にさせてもらう」

そう言い、腰をどっかりと下ろしながら、缶コーヒーを静かに呷る。風が吹いて、少しひんやり冷たいそれが頬と指先を冷やすのを、どこかぼんやり感じていた。

「におい」

「ん？」

「しとらんな。煙草の。ユウタ、預かってから、あんまり吸ってないんじゃろ」

静かに。穏やかに。どうってことないことのように尋ねられる。確かにその通りだったから、なんとはなしに小さく頷く。

「・・・・・・・・まあな。あんな小さい子供の前で、ぷかぷか吸うわけにもいかないだろ。あいつも気にするなって言ってるけど、身体に良くないんだし」

喘息の症状こそ出ていないが、ユウタは食べ物だけじゃなく、埃や空気にも敏感だ。今こそ少し慣れはしたが、修理場のバイクの排気ガスに最初はすごく咳き込んでいたし、毛布を出した時も若干むせて、慌てて押入れにしまい込んだ。子供の隣で吸うのは論外だが、一緒にいる時、衣服に匂いが付いていてもよくないだろうと、ここしばらく店の外以外で、煙草を吸うのはやめていた。

「吸えなくていらいらすることないんか？」

「してるよ。すごくいらいらしてる。だから早く帰ってくれ。じゃなきゃ、落ち着いて吸えやしない」

「嘘じゃな」

あっさり断言され、思わず頭上を睨み上げると、思いの外笑みの少ない真剣な顔で、そのまま言葉を続けられた。

「お前がいらいらしとるのは、自分がいれば吸えないってわかっとるから、お前の傍に居続けて、無茶な吸い方できなくさせた、おれが鬱陶しいからじゃろ。おれがいなくなったところで、ユウタと一緒にいる限り、お前が吸えないってわかっていながら、それでもそのことほじくり返されんのが、鬱陶しいだけなんじゃろう？」

アルと一緒に転げるように走り回るユウタを見つめて、剛が静かに口を開く。

「煙草、やめられるんじゃろ。なのに、どうして吸い続ける？」

責めるのでも、問い詰めているわけでもない。ただ、尋ねるだけの真っ直ぐな瞳に見据えられる。

「・・・・・・・・わからないよ」

ぽつりと、それだけを口にする。ゆっくり、静かに視線を逸らし、手の中に握り締めた冷たい缶にそっと移す。

そんな吸い方続けたら、お前、いつか死んじゃうぞ。

今の店に勤め始めた時、どこにいるかもわからない祖父より歳を重ねているであろうシゲさんと二人きりになった時、告げられたことを思い出す。

猫の額ほどの広さの店の裏の駐車場。仕事が終わりに、休憩の時間が訪れる度、店の隣の自販機で買った煙草を握り締め、一箱中身がなくなるまでゆっくり白い煙を上げ、そんなことを一日二回、きっちり二箱繰り返して、吸殻を灰皿代わりにバケツに無機質に落としていく自分を見て、どこか鋭く、人の中身を抉るような表情で、油まみれの作業着を着た老人はそう言った。

本数だけなら決して、飛び抜けてひどい喫煙者というわけでもなく、中毒者であるわけでもない。ただ淡々と、煙を肺と身体に流し込む自分を見て、苦虫を噛み潰したように顔を顰め、こっちをじっと睨んでいた。自分も吸っているくせに。あの時、そう軽口を叩く気にもなれず、ただ黙って俯いたのは、あの真剣な眼差しと、心臓の奥まで見透かすような強い視線があったからだ。

「どうしてもやめられないっていうのと、やめないっていうのは別物だろ。お前に、どうこう言われる筋合いはない」

答えになっていないと知りながら、そんな言葉で口を閉ざす。追求されるかと思ったが、剛は、そうか、と頷いて、つい、と顔を前に向けた。

「お前がそう言うんだったら、それでいい」

「・・・・・・・・なんだよ、それ」

「別に。説教でもしてほしかったか？」

「冗談」

「だろうな」

張り詰めていた空気がふっと緩み、いつものやり取りに戻る。顔を上げると、普段とあまり変わらない剛の顔がこっちを見下ろしていて、肩から少し力が抜けた。

「元々、おれはお前に身体大事にしろなんて、言えるような立場じゃねえし」

「じゃあ、なんで言うんだよ」

「・・・・・・・・さあ」

「なんだよ。それ」

「心配しとるから」

あっさり、事も無げに言われ、思わず動きがぴたりと止まる。

「そう言ったら、お前、やめてくれるのか？」

「・・・・・・・・まさか」

「じゃろ。だったら、言ってもしょうがない。お前の得意な台詞じゃねえか」

そう告げられたその言葉に、応えることはできなかった。やめてくれるのか、と問われた瞬間、搾り出すように返した台詞は、ほんの少し掠れていて。くだらない冗談を言うなど、笑い飛ばすこともできなかった。

おねえちゃん。あのね—————

「・・・・・・・・そんな顔すんな。お前のこと、心配しとるのは本当じゃから」

遠いどこかに置いてきた記憶が、脳裏を掠めるのと同時に、頭の上に大きな手が、ぽんと優しくのせられた。

まるで子供をあやすように、くしゃくしゃと撫でられて。

だから、もう少し素直になれ。そう言われているような気がして、ぱっとその手を振り払った。

「ほら。アルがユウタに、休憩したいって言っとるぞ」

十何メートル離れた向こう。いつまでもボールを投げ続けようとするユウタの前で、いい加減疲れたと舌を出し、芝生の上にぺたりと寝転び息を整えているアルと、もうちょっと遊ぼうとせがむユウタに手を振りながら、剛がベンチから立ち上がった。

「それ。ちゃんと、考えといてくれよ。有効期限、まだ先じゃから」

上着のポケットに入れたままのチケットを指差し、剛が笑って去っていく。ベンチに取り残されたまま、一枚取り出したそれを眺め、一瞬過ぎた昔に、ほんの少し想いを馳せる。

もし、なんでもできたら、なにがしたい？

そう尋ねかけた幼子が、小さな指を折りながら、一つずつ口ずさんで並べる内容を数え上げる。

外に行くこと。歌を唄うこと。犬を飼うこと。虹を見ること。海で泳ぐこと。色とりどりの飴玉を集め、サイダーを思う存分飲んで。まるでお月さまのようにきれいで丸いホットケーキを、自分で焼いて食べること。風が吹いている空の下、思う存分走ること。

叶えることのできなかった、他愛ない小さな願い事を一つ一つ数えながら、とうに空になってしまった冷たい缶を、黙って強く握り締める。

してあげたかったそれらを全て、あの子にしてあげられていたら、あの子は生きてくれただろうか。たとえほんの少しだけでも、もっと長く笑ってくれていただろうか。あの子の笑顔を永久に、失わなくても済んだだろうか。

．．．．．心配されるような資格なんて、自分にありはしないのに。

ぎしり、とスチールの缶を軋ませ、僅かにいびつに歪んだそれを、ゴミ箱に向かって投げ入れる。縁にあたって跳ね返り、一瞬こぼれかけたそれはなんとかぎりぎり転がり落ち、ぽっかりと開いた丸い穴に吸い込まれるように消えていった。

「おねえちゃん！」

祈り続ければいつか虹が微笑む。つらいときもきっと、信じていれば、夢はかなう。

そんなことを無邪気に口ずさむことも、歌うことも、もうできないけど。こっちに向かって声を上げ、頬を蒸気させながら、剛の肩の上で手を振るユウタに笑いかける。

「落ちんなよ————今、そっち行く」

まだ、今はこれでいい。

だからもう少しだけ。どうか、このまま、笑っていて。

胸の内でそう願いながら、足元の土を蹴り、遠い記憶に封をして、三人に向かって歩いていく。なにかを感じ取ったのか、地面に伏せていたアルがほんの少し、耳をぴくりと動かしたけど、特に何も言おうとせず、黙って自分を見つめていた。季節は春。冬の名残が、ゆっくり姿を消してゆく中、ガラスの靴を履いて踊るお姫様が着ていたドレスと、絵本に描かれたサイダーみたいに薄い水色に染まった空が、自分達を見下ろしていた。

鳩山 × 一路 サブカル対談

第6回



私たち二人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

第6回目のテーマは、『2012夏映画』です。(※ネタバレ注意！！)

鍵泥棒のメソッド

鳩山…今回は短編集的にこの夏観た映画を語るということで。まずは一緒に観た『鍵泥棒のメソッド』について。どうだった？

一路…普通に楽しかった！

鳩山…ぱっと見て、楽しかった！って終われるような映画だったね。

一路…内田けんじ監督の作品って、いろんな人が出てきて、その人たちが微妙に重なりながら物語が進んで行くような感じよね。前の『アフタースクール』も同じ。

鳩山…『アフタースクール』観たってことは覚えてるけど、内容をびっくりするぐらい覚えてないよ(笑)

一路…私もあんまり覚えてないな(笑)

鳩山…一路さんと面白かったって言い合った記憶はあるんだけど。

一路…内田監督の作品自体がそういうことなのかなって思う。いろいろ展開するんだけど、最終的にはきれいにまとまって後にひきずらないから、あんまり覚えてない。『運命じゃない人』もそんな感じかな。面白かったけど、詳細は記憶に残らない。

鳩山…後で対談するから、話す観点を探そうと思って観てたんだ。二人とも人生うまくいってない二人が入れ替わるっていうのが良いのかなと。普通は、金持ちと貧乏とか間逆の人が入れ替わるんだけど、裏稼業の人と自殺しそうな人っていうどっちになっても大差ない人が入れ替わるところが面白いなって思ってた。でも結局、最後まででもよくなったもんね(笑)

一路…ははは(笑)でも、裏稼業の人も結局お金あるしね。途中で裏稼業の人に入れ替わった方がいじやんとか思っちゃったけど、でもこの人、人殺しなんだよなと思うから、やっぱり入れ替わりたくない人だと思っただけ。でも結局人殺しじゃなかったからね。裏稼業の人の方がいいと思っりました。

鳩山…良い人で、頭も良くて、真面目で几帳面。良いなと思ったのは、真面目な二人がうまくいくところだね。

一路…あの二人似合ってるよね。私が面白いなと思ったのは、冒頭で広末涼子が「私、結婚することにしました」って言った時にチームが結婚をまるで仕事のプロジェクトみたいにしちゃうところ。みんなで頑張り

ましよう、みたいな感じが笑えた。

鳩山…笑える要素いっぱいあったよね。写真見て、「ギリギリありです」「うちの旦那です」とか、堺雅人の寝顔とか、想い出の写真の話してたらゴミ袋から出てくるとか。そういう小ネタが好きで監督なんだろうね。

一路…結局誰も人が死なないところも、誰が見ても面白いコメディって感じなのかなと思う。三谷幸喜の映画も、そんな感じ。

鳩山…誰も傷つかずに終わるよね。『ステキな金縛り』を観に行った時も、みんなが結構笑ってて、劇場が一体感に包まれるみたいな。そんな映画もあるんだなって思った。

一路…うちの母親が国際線の飛行機内で、どうしても韓国映画観たいって言って、チャンネル合わせたら日本語訳がなかったんだけどそれでもいいって言うの。で、内容分かっているのかなと思ったら、見てて大笑いしてるからびっくりした。言葉が分からないのに、映像を見るだけで、何言ってるか推測しながらでも笑える。分かりやすいシンブルな笑いなんだなと思った。王道っていうか。ただ、『鍵泥棒のメソッド』はコメディ映画とも少し違う気もするけど。鳩山…メインのストーリーがあるからね。

一路…そうだね。そういえば、普通は広末涼子と堺雅人の恋愛かと思うんだけど、香川照之とっていう組み合わせがすごいよね。鳩山…何が良かったかって、香川照之と広末涼子が最後までつくつくとところが良いよね。

一路…それ何のポイント？ 真面目な人ってこと？

鳩山…真面目な人が否定されずに報われるっていうこと。

一路…なるほど。

鳩山…お金があんなに無いのに、売店に行つてノートを買うっていうところにもう最初から胸キュンしたよ。

一路…確かにね(笑)

鳩山…こんな風に観てみて、おもしろかったなうって満足して、後に残らないって映画も良いのかもね。

一路…そうだね、これはこれで一ジャンルというか。おもしろい映画だったね。以上！

桐島、部活やめるってよ

一路…この夏の映画で、鳩山さんのオススメは？

鳩山…私は『桐島、部活やめるってよ』とAKBのドキュメンタリーだね。とりあえず今日は『桐島』ってことで。

一路…うん。

鳩山…『桐島』は、ストーリーとしては、桐島っていう人気者の高校生がただバレー部を辞めるっていうだけの話なんだけど、色々なポジションの高校生が出てきて、勉強もスポーツも何でもできるモテる帰宅部の人とか、部活を頑張ってるけどうまくいかない体育部の人とか、いわゆるオタクな人とか。高校生たちの人間関係というか、ヒエラルキーが描かれている。で、それぞれの人たちのキャラが細かく描かれてて、こういう人いるな〜って感じなんだよね。セリフの言い回しとか細かくて。オタクの男の子がミルクティ飲んでるシーンとか…ミルクティ飲んでるよね！って思ったもんね。

で、桐島が部活を辞めるって話が持ち上がることで、そのヒエラルキーが揺らぎ始める。ヒエラルキーの上側にいる人のキャラが揺らいでいく。二面性が見えていくと

うか。自分でもどっちが本当か分からないような。マジナルマンの役割の人が出てくるんだよね。

一路…帰宅部の人やヒエラルキーの一番上なの？自分の青春時代を思うと、帰宅部より体育部の方が頂点だったような気がするけどな。体育部・文化部・帰宅部って感じだったような気がする。

鳩山…映画では、あえて帰宅部に入ってる感じだよ。運動もできるけど部活にはあえて入らないっていう。

一路…話聞いてて、ちょっと現代の部活事情ってそういう感じなのかなって思った。

現代はいろいろ刺激が多いから、部活入らなくても楽しめる帰宅部が良いみたいな。

鳩山…帰宅部っていても、部活やってる人から、練習試合だけで良いから来てくれって頼まれるぐらいに運動もできて、勉強もできて、かわいい彼女もいるっていう帰宅部だよ。まあ、学校によっても違うかもしれないけど、私は帰宅部の地位は映画と同じように高いイメージだけどね。

一路…そうなんだ。

鳩山…で、そのヒエラルキーが崩壊するっていうか、そんなヒエラルキーなんて本当

にあるのかってというのがこの映画のテーマなんだよ。ナンバー1である桐島は、実際は一度も映画に出てこないから、ナンバー2の人が実質ナンバー1なんだよね。その人が、部活もちゃんとやってないのに、野球上手くて、先輩に練習試合だけでも顔出してこれって頭下げにこられる人。後輩に頭を下げる先輩が、めっちゃかっこ悪いんだよね。才能なんか全然ないのに、ドラフトまでは部活引退しないとかなって。でも、色々騒ぎが起きて、そのヒエラルキーが揺らぐ中で、最後に、実質ナンバー1の男の子が「俺なんか全然かっこ良くないんだ」って言って涙ぐむシーンがあって。泥まみれになって毎日部活動に明け暮れる野球部の人たちと比べて、自分には何があるんだ？って感じになるんだよね。そこが、高校生モノなんだけど、大人が親でも楽しめる映画というか、むしろ、本当の高校生があつた映画を観ても、逆に何も思わないかもしれない。

一路…逆にそんな感じに作られてるんだ。

鳩山…主人公が映像部なんだけど、私が学生るとき映画撮ってたのもあって共感できるし。「将来、映画監督になるのか」って聞

かれて「そんなのなれないの分かってる」
って言う。こうやって撮ってたら、偉大な
映画監督がやってきたことと自分のやって
ることがつながってる気がするって。大き
な夢を語るんじゃないやなくて、身の丈に合った
ことを言う感じとか分かるなあと。野球部
の先輩とかも、自分で自分の実力は分かっ
てる感じで、特に大きな夢を抱いてるって
感じじゃないんだよね。そこがリアルな感
じなんだけど。でも、その中で、結局、本
当に楽しいことができてるのはどっちな
のか、本当にかっこ良いのはどっちなのか
問いかけてるの。

一路…なるほど。それで、最後まで桐島く
んは出てこないの？

鳩山…出てこない。

一路…トップが最後まで全く出てこない、
不在であるっていうことが、ヒエラルキー
の崩壊の象徴なんだろうね。

鳩山…トップがいなくなるっていうところ
から、人間関係とかに問題が生じてくる。
でもそれが、学校を辞めるとかじゃなくて、
部活を辞めるっていうすごく些細なことで、
それが高校生の世界を表しているなと思う。
ただ、自分が高校生のときに親たら面白い

かっていうとちょっと微妙。三十歳だから
こそ面白いと思えたのかなって思う。
一路…原作の小説が出た時に、会話の部分
がすごく現代語で書かれてて、それが若者
のリアルを表現してるって話題になったか
ら、内容もすごく現代っぽいのかと勝手に
思ってた。

鳩山…ただ、もしかしたら映画の演出でち
よっと変わってるのかもしれない。最後、

そのヒエラルキーの各ポジションの人たち
が、部活動の場所取りで争って物理的に戦
い合うって展開になるんだけど、それは映
画にしかない演出らしい。思わず文化部
がんばれ！って応援してしまいました。

一路…(笑)

鳩山…結局この映画の魅力は人物表現の緻
密さというか、一路さんが言うように会話
とか、キャラのリアルさだと思う。キャラ
っていうか、逆にいわゆる「キャラ」って
感じじゃなくて、人物像が固まってなくて、
自分の「キャラ」じゃないことをしてしま
ったり、コロコロ「キャラ」が変わったり、
自分でも自分の「キャラ」が把握できない
感じだったり、そういう人物表現が、リア
ルって印象を与えてるんだと思う。

『俺たちに明日はないッス』以来のおも
しろい映画だなんて思ったんだけど、そう
考えると、私ってよっぽど青春映画が好き
なのかなって、自分が恥ずかしかったよ。

ヘルタースケルター

鳩山…じゃあ次の映画ね。これは、一緒
じゃないけど、お互い観ている映画とい
うことで。一路さん、どうでした？

一路…全編通して「沢尻エリカのCM」っ
て感じだった。

鳩山…そうだった、そうだった。何か女性
受けが良いみたいだね。九割は女性が
見に行ってるとか聞いたけど。

一路…そうなの？

鳩山…結構エリカの濡れ場とかあるけど、
男性には響かないのかな？

一路…意外だね。でも蜷川実花の世界観
って女性が好きそうだなね。奇抜な色使
とか。特定のファンがついてそう。「女の戦
い」が好きな鳩山さんとしてはどうだった
の？

鳩山…確かに、「女の戦い」心から好きだけど。その点ではあんまり魅力を感じなかったな。頂上決戦すぎたのかな？美人同士の戦いだから…。

一路…いや、やっぱりこの映画のポイントのは沢尻エリカやあの後輩モデルっていうより、寺島しのぶなんだよね。彼氏をエリカに奪われたりして。

鳩山…そうだね！でもさ、そこで諍いが生じなかったじゃん？あそこで復讐してやる!!とかってなったら、私も共感したと思うんだけど。

一路…確かに。主従関係が最後まで崩れない。相当エリカが好きなんだってことは伝わったけどね。

鳩山…そうだね、しのぶは最後までエリカの味方だったもんね。しのぶはずっと「エリカには私しかない」幻想の中にいる人だった。確かにあの中で、一番感情移入しやすいのはしのぶだと思うけど、でもしのぶもイカれすぎてて、あの映画の中に感情移入できる人がいなかったな。

一路…うんうん。
鳩山…あの主人公だって、過去にどうい背景があるとか、感情表現とかもう少しあ

ったら違ったかもね。基本、女は整形したものだってことが前提にありすぎて。確かに気持ちは分かるけど。女の人は自分の見た目が人生に影響する割合が大きいし、見た目にコンプレックスがない人とかいいだろうし。整形してでもの上がりたいとか、そういうのあるなと思うんだけど。

一路…そうだね。
鳩山…うちの職場で、異動してきた人達が偉い人がずらっといる会議で、挨拶するところがあるんだけど、こないだ話題になったのが、その偉い人たちがみんな綺麗で若い女の子の時だけ揃って顔を上げるんだって。無意識なんだろうけどね。無意識だからこそなんだよね。そういうことと思うと、整形してでも美人になりたいと思うよ。それでも、あの映画には共感ができなかったよ。

逆、なぜあの映画に共感できないのか、それが気になるぐらいだよ。沢尻エリカっていうのが元凶なのかな？これが長沢まさみなら良いのか？

一路…いや、あれは沢尻エリカだから良いんじゃない？まさにハマリ役だったよ。エリカの人生じゃないかと思うくらい。もてはやされて落とされて。

鳩山…うーん。私もそう思う。最後、落ちるところまで落ちるんだけど、そこでダメになるんじゃないかと、社会の底の世界でも、新たな地位を確立しているというか、負けないところが良かったね。

一路…そうだね。でもその強さを、どうやってエリカが手に入れたかとか、やっぱり描かれてないよね。はじめから強い人として設定されてるといいうか。どの人も心は描かれていない。

鳩山…登場人物の独自のシーンがちよいちょい挟まるんだけどね。語ってるんだけど、語ってない。共感できる設定なんだけど、感情表現がなさすぎて、共感ができない感じになってるんだね。構図は「ブサイクのし上がる」ってシンプルなんだけどね。

あの映画には結局弱い人は出てこないよね。それがあの映画の魅力なんじゃないかと思いましたが。間違ってるのか合ってるのかは分からないけど、とにかく強く生きようとしている。エリカと後輩モデルの対立にしても、偽造と天然という対比なのかなって思うけど、途中で後輩モデルも吐いたりして体型を維持して話があつたりして、結局は本当の天然はでてこない。で

もそれが天然じゃないからこそ、強い人というか。強い人の映画というのが魅力なのかと思います。

一路：でも結局そこまでの魅力じゃないね。

鳩山：そうだね。「なぜ神様は若さや美しさを人間にまず与えて、それを奪うのか」とか「本当の美しさはそういうものじゃない」とか「本当の美しさはひとつのテーマなのかもしれないけど。でもやっぱりそういうことを描いた映画じゃないよね。「本当の美しさはそういうものじゃない」とってことだったら、よっぽど桐島の方が言ってるもんね。口でその台詞を言わせただけで、「本当の美しさはそういうものじゃない」とってことが言いたかった映画じゃないね。

一路：大森さんは全体的に要らないかもね。一人だけ説明的だし、何か浮いてる。あの台詞もなくて良かったんじゃない？

鳩山：そうだね。大森さんは要らないかもね。鈴木杏の台詞までは良いって私は思うけど。全盛期っていうか、ヒエラルキーの頂点でいられる時間というのは長くない、いつか失われる運命にあるって前提のもと、でも今日もがんばってる、明日はどうなるか分からないけど、今日はまだがんばって

るぞっていう映画なのかなって思うから。

一路：やっぱり沢尻エリカをふんだんに使って、あの監督の世界観で、映画自体が大きい広告みたいな感じで、でもそれで良いんじゃないのかって気がしてきた。心理描写とか、考えてなくてもそれで良いんじゃないのかな。ぱっと見て、ぱっと終わるというか。娯楽映画も一つの映画だしね。日常がづらいのに、映画観てまで暗い気持ちになりたくないって人も大勢いるだろうし、これはこれで良い気がしてきたよ。

鳩山：そうだね。じゃあ：それで良しってこと。

一路：とりあえず、関係ないけど、新井くん良かったしね。

鳩山：新井くん良かったね!!新井くんが良い映画ってことで、それで良いのかもね。

アンチエイ

鳩山：では、今度は一路さんのお勧め映画を。

一路：『I'M FLASH!』を撮った豊田利晃監督の初期の作品で『アンチエイン』ってい

う映画をお勧めするよ。「アンチエイン 梶」っていう大阪のボクサーを追ったドキュメンタリーなんだけど。

鳩山：へえ。

一路：梶は仲間思いで他にも友達のキックボクサーが何人か出てくるんだけど、その仲間たちの青春群像劇って感じ。最初は試合にも勝ってるんだけど、どんどん勝てなくなつて、梶が精神を病んでいく。自分は半人前だから「半助」って改名したり、便利屋みたいな商売を始めてトラブったりして。ハローワークみたいな所に殴り込みをかける。ペンキかぶったり、魂って書いたTシャツ着たり、タクシーハコ乗りしたり、イカれてる感じで殴り込みに行くの。で、結局は精神病院に入れられる。退院すると、自分の恋人が仲間の一人と結婚してる。男の青春の話なんだけど、全然勝てない男で、友達思いなんだけど、何か全体的なもの悲しさが魅力的な映画なんだよ。まとまりもないし、何か言いたいのかもはっきりしない映画なんだけどね。

友達思いで、まともになれない梶と結婚してちゃんとやっていこうっていう友達。でもどっちともキックボクシングの試合に

は勝てないしね。

鳩山…勝てない男たちの群像劇。

一路…そう。で、仲間の一人で殴り込みに来なかった「ガルーダ・テツ」っていうキックボクサーがいるんだけど、ガルーダの試合を精神病院から退院した梶が応援に行つて、勝つか負けるか分からないところで、梶が「なんでお前あの時殴り込みに来なかったんだ？」って問いかけて映画は終わるのね。それがどういう意味だったのかが分からなくてよく考えてる。たぶんあの試合も負けなんだろうけど、もし、ガルーダが試合に勝つんだつたら「お前は強いのに、なぜ殴り込みを手伝ってくれなかったのか」って意味になるし、試合に負けるんだつたら「友人関係として、仲間なのになぜ殴り込みに来なかったのか」ってことかな。でも今さら殴り込みの話を持ち出すっていうのもよく分からなくて、もやもやとよく考えてるよ。

鳩山…うーん。勝てない男たちの群像劇って聞いて、山下敦弘の『マイバックページ』を思い出したよ。あれも「結局僕たちは何者にもなれなかった」って言って終わるよね。なんか、そういうものに惹かれる気持

ちは分かります。全員がサクセスストーリーを生きられるわけじゃないし、むしろそういう人の方が多い。でもあの映画を観た時は、あまりにも悲しい気持ちになったよ。

するってことで、ある種のヒエラルキー的なものが描かれてるって言えるしね。アンチ・ヒエラルキーものもヒエラルキーものに含めるって感じで。

一路…そうだったね。

これは、私たちがヒエラルキーものが好きってことなのかな？世間的にもヒエラルキーものって多いってことかな？

鳩山…でも割合で言ったら、やっぱり勝ち続けることはできない人が多いわけ。むしろ大多数って言うてもいい。勝ち続ける人は一人だもんね。それが事実、それが現実だもんね。

一路…私たちがヒエラルキーもの好きじゃない？

一路…難しいね。そこにどう折り合いをつけるかってことなのかな。現実のヒエラルキーのなかで勝ち進めなくて、それでも地道に生き続ける。何らかの頂点を目指し続けるっていう…。

鳩山…そうか（笑）

鳩山…そうね。『鍵泥棒のメソッド』の中でも「人生に満足しているやつなんかいない」ってセリフがありましたもんね。

鳩山…私も最後の一人になんてなれないよ。でも、ヒエラルキーのトップが、バトル・ロワイアルの最後の一人になるとも限らない。

一路…ありました、ありました（笑）

鳩山…フィクションの中でも、ノンフィクションの中でも、何らかの戦いや、ヒエラルキーってものを描いた映画ってことで、

一路…そうね。

今回話題に挙がった映画にも、意外に共通点というかテーマがあったね。『鍵泥棒のメソッド』も二つの人生を取り替える、比較

鳩山…ヒエラルキーって、現実には何重にもある。現実には無数の尺度が存在するというか。その尺度を作るのも自分だし。自分はその自由でいたいって思ってるだけ

ど、実際は色々振り回されてるなあ。仕事
がどうか、結婚がどうか。

一路…人って人を評価したがる生き物だからね。いろいろな尺度で。評価しないと生きられないのかな。ある人間を本当に評価するには、相当いろんな要素について考える必要があるけど、現実には偏った一点を持って人間を評価して、その人の他の部分をバサバサ切り捨てたりすることがよくある。現実を進めるためには、そうするしかない部分もあるけど。

鳩山…実際に、仕事の場面で、仕事できなくて評価される人と仕事できないって評価される人がいるとする。で、仕事できる人のところには仕事が集まるから、その人はすごく残業とかして、仕事に忙殺される。

一方で仕事できないってなった人は、そういう評価はあったとしても、毎日早く帰って、ストレスは少なく、実はすごくプライベートは充実してたとする。そうするとどっちが勝ちかは分からないよね。そういう風に、どっちが勝ってるかの判断ってすごく難しい。ヒエラルキーっていうのは現実にあるんだけど、複数のヒエラルキーが絡み合ってるから、誰が勝者なのかってこ

とをはっきりさせるのは難しい。仮に一端はヒエラルキーの頂点に立ったとしても、時間とともに状況は刻々と変化するし。自分も変化するし、社会も変化するし。それこそ、ある日突然交通事故で死ぬとか、予測不可能な要因もあるし。極論だけど。ある程度はコントロールできるけど、万全じゃない。だから、複雑だよ、人間の戦いつて。

一路…戦い(笑)私はできれば戦わずに生きたいけど。

鳩山…そうだねえ。スローライフ的なものが素敵に思えたり、お前なまけてんじやないのって思えたり、何事にも表裏一体のものがある。だからこそ、何に価値を置いて生きるかとか、そのためにどれだけのことをするかとか、本当に千差万別で、自分で選び取るしかないってことだね。

一路…そうだね。自分で選び取るしかない。選び取ったと思っても、いろいろな圧力によって結構揺らいじゃうんだけどね。でもまずは自分で選び取るころから始まるってことで、今日は終了!

(了)

(補足) 各映画のあらすじ

『鍵泥棒のメソッド』

売れない貧乏役者(境雅人)と伝説の殺し屋コンドウ(香川照之)の人生がひょんなことから入れ替わる!?そこに婚活中の女性編集者(広末涼子)が絡んできて…

『桐島、部活やめるってよ』

桐島というクラスメイトが金曜日に部活を辞めた。学校の小さな大事件から広がる波紋。僕たちが日常だと信じていたものが、その日壊れ始めた…

『ヘルター スケルター』

全身整形のトップスターリリコ(沢尻エリカ)が『冒険』の果てに辿り着く世界とは?究極の美とその崩壊、現実と悪夢の狭間でさまよいながら、リリコは誰よりもスキャンダラスに東京の街を疾走する!!キャスト補足…寺島しのぶ(リリコのマネージャー)、恋人をリリコに奪取られるも、その後もリリコに付き従う。リリコとは真逆な地味な女)、大森南朋(リリコの事件を追う検事)、鈴木杏(大森南朋の同僚)、新井浩文(リリコのヘアメイクさん。驚きのおねえ役に挑戦)

『アンチエイン』

豊田利晃制作のドキュメンタリー映画。アンチエイン概は実在のプロボクサー。20歳でプロボクサーデビュー、戦績7戦6敗1引き分け。引退後の活動は、福祉施設でボランティア、FM局のDJ、何でも屋開業など多岐に渡る。ちなみにアンチエインの意味は、『く』を解放する。

ペンギンとイヌ

連載第6回

いちろ まみ

前回までのあらすじ

ペンギンのぺんちゃんは、南極大学から日本のある大学に留学中。ぺんちゃんは相棒のイヌの友達である亀くんが、時間ルーズで大学を休学していることを知る。夜じゅう、亀くんが大学に来るにはどうしたらいいかを話し合ったぺんちゃんといヌなのでした。

第10話 亀くん救出、大作戦！

ちゅんちゅんという鳥のさえずりでぺんちゃんは目覚めました。ベッドから降りると、床に丸まって寝ていたイヌの背中を思わず踏んづけてしまいました。

「わふっ！」

イヌは突然背中に重いものが落ちてきて、びっくりして飛び起きました。わふっつとあくびをしているイヌを見ながら、ぺんちゃんは言いました。

「何でイヌがいるぺひ？」

「昨日、亀くんを助ける会議をしたからわふ！ ペんちゃん、先に寝るし、イヌのこと忘れるし、ひどいわふ……」

ぺんちゃんはひれをぺちんとたたきました。

「そうだったぺい。でも、どうやって助けるぺひ？」

イヌは言いました。

「やっぱり毎日朝迎えに行くのが一番わふ」

「わかったぺい。さっそく亀くんちに行くぺひ！」

ぺんちゃんがそう言うと、イヌは満足そうにうなずいて鼻をすんと鳴らしました。二匹は顔を洗うと、急いで亀くんの家に向かいました。

イヌの足が止まったところは、まるでお城のようなお屋敷でした。鉄のどっしりした門があり、塀が建物を覆い隠すようにぐるりと囲んでいます。門の隙間から見えた建物は四階立ての古い洋館で、壁にはつたがずると這っていました。建物の玄関には、チョコレート色の板の形をした重厚な扉があります。

「本当にここぺひ？」

ぺんちゃんは門の前で思わず建物を見上げました。すると、最上階の窓から二匹を見ている者がいます。ぺんちゃんはひれで太陽を覆い隠しながら、窓辺をじっくり見つめました。

「ぺんちゃん、目つきが悪いわふ」

そう言うと、イヌもぺんちゃんが見つめる方向を見ました。すると、イヌが突然、

「わん！ わん！ わん！」

と叫びました。

「どうしたぺひ?! 急に犬らしく叫んで」

「あの窓のところにいるのは亀くんわふ！」

すると、窓辺の亀くんが伸ばした首をのっそりとこちらに向きました。

「あゝイヌくゝんかめかめ。どうしゝてゝそゝんなところにしゝるゝかめかめ？」

亀くんのゆっくりな話し方に、ペンちゃんはくすつと笑ってしまいました。イヌは言いました。

「亀くん！一緒に大学に行くわふ！」

亀くんは、思っていたよりもあっさりと答えました。

「もゝちろゝん、いゝくゝかめかめ。おりゝるかゝらすこおゝしゝまゝつかめかめ」

ボタンと窓が閉まったので、二匹は門の前で待ちました。

しかし、一向に玄関の扉は開く気配がありません。

「おかしいべひ」

「わふ」

イヌは大きなあくびをして、門の前に寝そべりました。

「全然出て来ないわふ」

一時間ほど経とうとしていた頃、ゆっくり扉が開きました。

「べん！」

先に気付いたべんちゃんがイヌの背中をひいで叩きました。

二匹は慌てて立ち上がり、門の鉄格子の隙間から、玄関の扉を開けて出てくるであろう亀くんを見つけていました。

しかし、そこから出てきたのは、力の強そうな大きな熊でした。

「全然違うべひ……」

熊はのっしのっしと歩いてきて、鉄の門を何事もないうろに あっさり と開けると出ていきました。べんちゃんとイヌは、熊と入れ替わりに敷地内にこっそり忍び込みました。

玄関の扉まで庭が広がっています。緑や草花が生い茂り、石が整頓されて並べられています。耳に定期的に響く水の音は、庭の真ん中の噴水が時折水を吹き上げているからでした。すべてが氷に覆われた南極から来たべんちゃんには、そうした庭の景色の一つ一つが新鮮なものに感じられました。

「水浴びしたいべひ……」

べんちゃんが噴水に気を取られていると、イヌが言いました。

「亀くんわふ！」

べんちゃんも慌てて玄関を見ましたが、亀くんは見あたりません。

「どこべい？」

すると、イヌが駆け出しました。

慌てて後を追うと、先に扉の前にたどり着いたイヌが、なにやら掘るしぐさをしています。しかし、コンクリートの玄関では、前足が滑り、爪のカシャカシャという音が響くだけです。

「イヌ、そんなところ掘ってもだめべい」

べんちゃんは近くにきてようやく事態がわかり、目を丸くしました。そこには扉の隙間に挟まっている亀くんの姿があったのです。首や手足は固い甲羅に納められており、扉のストッパーのようになってしまっていました。

すると、その隙間からネズミたちがたくさん出てきました。集団で登校するようです。軽やかに亀くんを飛び越えていきます。

「ぐるるるる。何で手伝わないわう！」

怒ったイヌがネズミにうなり声を上げました。すると最後に出たネズミが言いました。

「だって、そいついつもそこに挟まってるチュウ」

そして、ネズミたちは一斉に駆けていきました。

「亀くんはどうしてここに挟まったわふ？」

イヌが尋ねると、亀くんは甲羅の中からぐもった声を出しました。

「とびくらぐがおもぐくて、はやくくしまぐってしまぐうかめかめ。あぐけぐででぐるぐまでに、ちかぐらぐつぐきて、いぐつもぐはさぐまあつてしまぐうぐかめかめ」

ぺんちゃんと言いました。

「亀くんは朝早く起きても、この家に住んでる限り大学に行けないべひ」

しかし、亀くんは言いました。

「でぐもぐ、こぐのぐいえぐはぐきにぐいぐつてぐるかめかめ」

イヌは前足を亀くんの甲羅にかけ、引っ張り出そうとしますが肉球がすべってうまくいきません。ぺんちゃんもひれでつかみませんが、扉が重くびったり挟まっているので、亀くんはびくともしませんでした。ぐつとひれに力を入れると亀くんの甲羅の丸みにそってつるんとひれがすべり、その拍子に

ぺんちゃんはごろんと庭に投げ出されました。腹ばいになったまふと顔を上げると、一階の窓の隙間からきらきらした光と、恐ろしい目玉が見えたような気がしました。

「べひ?!」

すると、玄関の奥からドドドという地響きのような音が鳴り始めました。突然、ドーンという大きな音がして、扉が開くと亀くんもイヌも吹き飛ばされてしまいました。

「かぐめぐかぐめぐ！」

「わーふー！」

二匹を外へ押し出したのは、体長二メートルもある大きなマグロでした。しかし、吹き飛ばされた後、イヌの姿が見えなくなりました。庭の端で見ていたぺんちゃんは、きよろきよろ見回しました。

すると、地面からイヌの声がしてきます。

「重たいわふー！」

イヌはマグロの下敷きになっていたのでした。マグロはヒレをうまく使って移動し、イヌから体はずしました。体は大きくても動きは俊敏です。

イヌはようやく立ち上がると、上に乗っていたマグロの姿を見ました。あまりにも大きく、体の上半分が海の底を思わせる黒さで、下半分の銀色がてらてらと光っています。マグロは庭の芝生の上に立っていました。そして、マグロが目まぎよろつと回したので、イヌは体をふるわせました。

転がっていた亀くんもようやく首と手足を甲羅から出して、大きく伸びをしました。そして、マグロの姿を捉えると、

いつもの調子で言いました。

「あくりがとろう、あなうたはさだくれかめかめ？」

すると、先ほどはぎよろつとしていた目が丸くきらきら輝きました。マグロは言いました。

「一階に住んでる『トロ』とろ。亀くんがいつも挟まっっているのを見て気になっていたとろ」

ぺんちゃんはトロに近づきました。

「亀くんを助けてくれてありがとうございます」

そして、何かを思いついたようにぺんちゃんは体を一度ふるわせると、トロに言いました。

「この扉は亀くんにとっては重すぎるべひ。もしよかったら……亀くんが外に出るときは一緒に押し出してもらえないべひ？」

すると、トロは大きな口を開けました。口の中からはたくさん小さなキバが見えて、一瞬食べられるかとぺんちゃんは見つめました。しかし、それはトロなりの笑顔なのです。「今まで、こんなに体が大きくてキバもたくさんあるから、みんなに怖がられてばかりだったとろ。でも、これからは亀くんの役に立ててうれしいとろ！」

すると、伊又が言いました。

「でも、亀くんを押しつぶさないように気をつけてほしいわふ……」

ぺんちゃんは、ぺひひっと声を出して笑いました。

(つづく)



第三回 名演のススメ

冒頭のトレモロ*1が鳴り響いた時、それはすでに期待以上のものだった。トレモロに乗って独奏ヴァイオリンが歌い出した時、それは確信となった。

演奏会： ジャパン・シンフォニア 第14回定期演奏会

日時等： 2009年5月9日(日) 晴海トリトンスクエア・第一生命ホール

演奏曲目：チャイコフスキー*2：「フランチェスカ・ダ・リミニ」Op.32

ハチャトゥリアン*3：劇付随音楽「仮面舞踏会」組曲

シベリウス*4：ヴァイオリン協奏曲ニ短調、Op.47

アンコール チェクナヴォリアン*5：「愛のワルツ」

指揮： 井上喜惟

独奏者： 植村理葉(ヴァイオリン)

演奏： ジャパン・シンフォニア

指揮者の井上喜惟*6は、私にとって、毎回の演奏会を期待できる数少ない指揮者の一人である*7。年に3回、定期演奏会を行う*8。

初めてこの指揮者の演奏会を聴いたのは、2006年の11月のことだった。その時は、モーツァルトの曲のみでプログラムされた演奏会だった。オーケストラが一体となって奏でる音楽は滅多に聴けない最高クラスのものだった。特に、最後に演奏された交響曲第41番「ジュピター」*9は、音が透明で柔らかいのに勢いがあるというこれまで予想もしていなかった名演奏。私のような凡人の、凝り固まった音楽イメージをもの見事に粉碎してくれた。それ以来、この指揮者の演奏会には無理して出かけるようにしている。

素晴らしい演奏家は、素晴らしい演奏をする。オーケストラはまるで一つの楽器のようになって音楽を具現化する。しかし、それだけではない。

今回紹介する演奏会だが、困ったことに、私にはどの演奏曲にも思い入れはなく、正直なところ「習慣」で出かけたようなものだった。ことにシベリウスの曲は、一度ひどい演奏会*10に出くわして、退屈を絵に描いたような40分を過ごしたことがある。今にして思うと、よくまた出かけたものだと思う。演奏者にはなんとも失礼な話である。

しかし、演奏会はこちらが降参といたくなる素晴らしいものとなった。チャイコフスキーはオーケストラが引き締まっていて気持ちがよく、またハチャトゥリアンでは、何と云えばいいのだろう、ちょっと時代がかっていて、まるで「活動写真」を見てみたい曲。それこそ「総天然色」を謳った時代の映画みたい。大時代的で豪華な音楽と、時折忍び込む寂しさがたまらない。

ここまでだったら、普通のいい演奏会で終わっていただろう*11。しかし、休憩時間を経て、本日のメインプログラムであるシベリウスのヴァイオリン協奏曲が衝撃的な演奏だった。

序奏のトレモロが鳴り出した途端、これはとんでもない演奏になるとほとんど確信に近い予感がした。続いて、完璧なタイミングで独奏ヴァイオリンが入って来る。この「完璧」とは、技術的なことではない。あまりに自然で、全く自明としか思えない入り方をしたということである。しかも私にまるで予知能力が備わったかのように、そこにヴァイオリンが入ってくることは予感された。そしてそれがそのまま実現されたのだ。その間ほんの数秒のことである*12。「これは名演奏になる!」、私は一人勝手に確信し、そして音楽に丸ごと吸い込まれてしまった。

音楽とはなんと分かりやすいものなのだろう! 言葉を介さないメッセージが、直接体の中に入って来る。それは言語を使うときのように、一旦別のものに置き換える過程を経て他者に伝えられるものではない。一方の意識の中にあることが、そのまま流れこむように他者に伝達される。

もしかしたら、催眠術のようなものかもしれない。私はもう曲がどういうものであるか、頭を巡らせる必要はなかった。シベリウスがこの曲で何を表そうとしたか、いや、何か言葉に表せない何か、それは意識かもしれない、私の中に直接働きかけてきた。

音楽はとうとうと流れ、私とこのシベリウスの曲は一体化する。私は、この曲と溶けあい、作曲家(あるいは演奏家)にその中を引き回される*13。音楽は私の中で実体化し、手に触れることができるかのようにその全体を現す。

こんなに感覚だけの世界に没入してしまっていていいものだろうか? これが正しい聴き方なのだろうか?

音楽の本に「構造的聴取」をせよと言った哲学者がいた*14。曲の構造を明らかにし、理性で音楽を解読しようとするものである。西洋音楽が論理学と手を携え、芸術に昇華したことを踏まえている。それは全く正しい鑑賞法である。けれど、それだけでいいのだろうか? 今回の私の体験は、また別の音楽の受け取り方ではあるまいか? それとも、もしかして私はクラシック音楽のまだまだ入り口をうろついているに過ぎないのだろうか? その思いをかき消すかのように、シベリウスは私に語りかけてくる。

演奏が終わってからのことは、あまり覚えていない。アンコールはもちろん素晴らしい演奏だったけれど、さっき聴いたシベリウスの後では、生半可な名曲では、それもアンコール用の小曲では、どうしても印象が薄くなってしまう。

ともかく、これまでに体験したことのない演奏を聴いてしまった。その日家に戻るとすぐ、また同じような体験を試みたくなり、持っているシベリウス同曲のCDを引っ張りだして聴いた。以前は退屈で仕方なかった曲が、決して凡庸な曲ではなく、起承転結のある大曲だと認識できたことは収穫だった*18。しかし、我が家のオーディオとCDでは、とてもあの演奏会と同じような

体験はできなかった。

それからしばらくして、先の演奏会がYouTubeにアップされた*19。「もしかしたら、あの時の感覚をもう一度味わえるかもしれない」と期待したけれど、(録音が良いせいだろう)あの時の演奏会とはまるで別の演奏に聞こえる。音楽を聴くとは、演奏者と一緒になってあの時間と空間を体験するものだ。だから、音楽は生で体験しなければならない。それもとびっきりいい演奏を*20。

*1：トレモロとは、同じ高さの音を、小刻みに演奏するもの。楽器の発展とともに、以前はできなかった弱音が出せるようになった。近代以降、多くの作曲家はトレモロを多用する。

*2：ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)。ロシア出身。交響曲第6番「悲愴」、バレエ音楽「白鳥の湖」が有名。クラシック後進国だったロシア出身ながら、今や音楽の教科書には必ず載っている。その死が何かと話題になる。

*3：アラム・イリイチ・ハチャトゥリアン(1903-1978)。ソ連(アルメニア)出身の作曲家。ほとんど「剣の舞(ガイーン)」だけで知られる。

*4：ヤン・シベリウス(1865-1957)。フィンランド出身の作曲家。シベリウス作曲の有名曲「フィンランディア」は、当時ソ連の圧政下にあったフィンランド人の心の拠り所となった。しかし、彼の曲の大半はドイツ、フランス、そしてイタリアを期限とするクラシック音楽とは、形式はともかくとして、発想において全く異なる独特の音楽である。天才的な作曲家はみな、誰も真似できない個性を持っているからだ。ちなみに、シベリウスは晩年の約30年、ほとんど作曲をしていない。どうしてだろうか？

*5：ロリス・チェクナヴォリアン(1937-)。イラン出身のアルメニア人作曲家。井上喜惟の友人。

*6：井上喜惟(いのうえひさよし、1962-)。ベテラン指揮者の井上道義とは別人。多分血縁関係もないと思う。

*7：毎度のことながら偉そうな書き方となっしまい、実は恐縮している。

*8：今回紹介するジャパン・シンフォニア(年2回)の他に、ジャパン・グスタフ・マーラー・オーケストラ(JMO、年1回)の定期公演を行なっている。この他、ジャパン・シンフォニアとは年1回、ファミリー・コンサートを開催しているが、こちらはまだ出かけたことはない。演奏会日程は、各オーケストラのWeb Siteに掲載されている。

*9：モーツァルトが作曲した最後の交響曲。対位法を駆使した壮麗な最終楽章が素晴らしい。そのスケールの大きさから、「ジュピター(ゼウスのこと)」と呼ばれる。

*10：訳の分からない演奏会はよくある。演奏家があまりいい演奏家でない場合、指揮者とオーケストラが喧嘩している場合など原因は多々あるが、鑑賞する側が疲れていたりして、演奏に集中できないせいもある。ホロヴィッツというピアニストは、(おそらくそれがイヤだったのだろう)日曜の午後にしか演奏会を開かなかったという。

*11：実は、これら素晴らしい演奏を聴いたことで、最後の曲に集中できる準備ができたのだと思う。

*12：カルトみたいでちょっと危ないのではないかな？しかし、その時まさにそういう状態になったのだから仕方がない。名指揮者フルトヴェングラーは、オーケストラとの練習中いつも、「今まさに音楽が生まれてくるかのように演奏せよ」と話していたそう。すると、これがまさにそのケースなのだろう。

*13：その後、同じく井上喜惟の指揮でマーラーの交響曲第6番を聴いたとき、同様の体験を

した*15。この曲の「悲劇的」という標題*16から、それまで悲しい曲なのだろうと手前勝手に想像していた。ところが、演奏が始まってすぐ、これはとても言葉に出来ないような無慈悲で、圧倒的で、抗うことが全く不可能な、避けられない敗北(のようなもの*17)だと直感した。そして、心の底から恐怖した。そう、「悲劇的」なんて生易しいものではない。マーラーは、言葉にならない絶望的なそれに直面したのだ。それに押しつぶされないためだろうか？それを音楽にってしまったのだ。

*14：テオドール・アドルノ(1903-1969、ドイツの哲学者)。「不協和音」(平凡社)は素晴らしくとんがった音楽評論。大変面白い。

*15：これは別に井上喜惟のみが使う技ではない。念のため。

*16：クラシックに限らないが、「標題(サブタイトル)」をつけた曲は多数存在する。例えば、「運命」や「田園」など。しかし、「運命」は作曲者ベートーヴェンがつけた標題ではなかったり、ブルックナーの交響曲第4番「ロマンティック」のように、オリジナル「Die Romantische」のように原義とは別のニュアンスに変わってしまうものもある。面倒な話だ。

*17：私は、それを完全に言い表す言葉を持たない。

*18：いい演奏を聴いたお陰で、その曲が分かるということはよくある(完全に分かるということはないけど)。いい演奏は、曲の良い解説でもある。

*19：ジャパン・シンフォニアのWeb Siteにアップされている。CD化はされないのだろうか？

*20：指揮者のセルジウ・チェリビダッケ(1917-1996)は、録音を「音楽の缶詰」と呼び、彼の生きていた間、自身の演奏をCD化させなかった。チェリビダッケが最後に拠点としたミュンヘンでは、彼はほとんど神格化された存在だった。チェリビダッケの演奏はきっと素晴らしいものだったに違いない。チェリビダッケの死後、息子がCD化を許可し、チェリビダッケの演奏はCDで聴けるようになった。しかし、今更ながら、チェリビダッケの演奏会に行ってみたかった。

女三十、猫半年。

浦見魔血子

「では、明日の十時に迎えに参りますので...。」

「はい。大事にお預かりします。」

「あ！えーとあの、ヘンなこと聞いてすみませんね...。手術では何センチ位切るんですかね...。」

「3～4センチくらいでしょうか。」

「大切な一人娘なので、くれぐれもよろしくお願いしますね...。」

貧血でクラクラしながら病院を出る。まだまだ聞いておきたいことは色々あったけど、自重しておいた。三十歳目前未婚勿論子なしにして、モンスターペアレンツとはこのようなものかと悟った。

今日の午後、愛猫ムギが避妊手術を受ける。明日

朝にはまた会えるのに...。今日は何ヶ月ぶりかに彼女のいない一人の夜を過ごさなければならぬのだ。下腹に鈍痛が走った。

会社でたまーに、お菓子などを少量いただいた時なんかには、女性社員が少ないからなのかどうなのか「女の子だけにあげるー！」とかいうシチュエーションがあるのだけど、それを自分が受け取るのに非常に抵抗を感じる。

甘いものがそんなに好きではないというのもあるのだけれど「女の子だけ特別扱い」みたいなイベントがちょっと...。「子」って年ではないだろう、というのともまずはあるし、「女だから」ということで利益を得てしまうと、逆に「女だから」と言っても損をしても文句を言えない様な気がして。（女だからお茶淹れてコピーでもとってる、的な。って、今時そんなないか...）

ちっちゃーな...と、自分でも思う。でも本当に、いやな気持ちになる瞬間。ヘンなのかな。

今も充分そうなのだけど、多感な時期にかわいい女の子ではなかった私は、あー私はかわいい女の子たちとは違うんだ。普通の人間じゃないんだ。と、ずっとずっと思っていて。だからキワモノとして生きるしかないのだと。だから「女としての利益を享受していない分、損もすまい」と。そう思って生きてきた。

だけど、生物としてはやはり女で。それを毎月気付かされる。えぐられるような強い痛みと吐き気、めまい。「そんなものないんやー！」と、ガンガン薬のんで乗り切っているのだけど、最近はいくら薬を飲んでも、まったくもって効かなくなってしまった。あまりに酷いので、一度病院に行ってみようかなとも思う。そういう病気だったらね、手遅れでしんでしまったら、だれがねこの世話をするのー！と。（そこかい）

かなわない発情、あるいは望まれない繁殖を防ぐことと、生殖器系の病気のリスクを防ぐため、生後半年位で避妊手術をすべきであると、ムギのかかりつけの先生から提案された。ペットとして暮らすならやってあげた方がいいのだというのは、重々承知しているのだけれど、からだにメスをいれるという事は、かなり負担がかかるのだろうし、お母さんになれなくて、子どものままで、ムギは幸せなんだろうかとも思ってしまう。（動物だから只単に本能のまま生きてるのだろうけど）

病気で失くされる方もいらっしゃる中不謹慎かもしれないけど、私もムギと一緒に失くしてしまってもいいのではないかな。そうすれば毎月苦しむこともなくなるし、そもそも道具がなければ、誰かに利用されたり傷つくこともないのかもしれない。私はきっと、この先正しい形でそれを使う日は来ないような気がする。愛してくれないだれかを無理矢理繋ぎとめたり、だれかの快樂のための道具になることはあるだろうが。あーでも男が取るってのは聞くけど、女バージョンってあるのかな。無いん？何より今、腹いて一んじゃボケ！

そうして夜はふけてゆく。日本酒を飲んでいる。べろんべろん！イエー！

朝が来て、病院へ走る。予定より早く到着してしまった。二日酔いの頭が重い。

「いや一本当に、早く迎えに来てくれてよかった！危なかったんですよ...。」と先生。

「えー！ムギは！ムギっちゃまくんは大丈夫なんですかー？」

術後の経過は順調。昨日は夜には麻酔からさめて、モリモリごはんを食べていたのだそう。だけど元気すぎて、ケージから出ようと夜通しケージの柵に頭突きを繰り返していたのだそうだ...。

「頭のところがちょっと赤くなっちゃってるんですよ...。ほんと、早く連れて帰ってあげてください...。」

無事でよかった。元気でよかった。元気すぎたみたいで、先生ほんとすみません...。いやまじで。

ムギが来てくれて、本当に救われたのだ。病院の前で震えていたのを、先生に助けられたというムギ。最初は本当に小さくて、ムギは白いから「お前...ネズミか！」と思った程だった。だんだんいろんなことができるようになってきて、

「おーい！こんなところにも登れるんかい！あらあらお皿をひっくり返しちゃって。...すごいでちゅねー（泣）」なんて、悪さもいっぱいしたけれど、ずっと一人だった私にとっては、毎日の変化が本当に楽しくて仕方がなかったのだ。最近はドメスティックバイオレンスも激しいけれど...。

来週私は、三十になる。

猫と生きて行く。



特撮考察

ババ タカオ

幼い頃より、特撮番組が好きで、そんな子供がそのまま大人になったような僕である。宅配レンタルと言うものは、本当に便利で、近辺のショップでは扱っていない作品なども手軽に見る事ができる。

便利な時代である。

そんな便利な時代の寵児として、今昔の特撮についての愛を語ってしまおうかと言う趣旨の本文である。

主観まみれの雑文なれど、主観こそが文章の醍醐味と思われる方は、お読みいただきたい。

今回は、仮面ライダーとウルトラマンである。

共に、日本を代表する特撮ヒーローとして名高いが、ここ最近では、仮面ライダーは10年以上テレビシリーズを続けているのに対して、ウルトラマンは映画と、「ウルトラマン列伝」という過去のシリーズからのダイジェスト番組で展開されており、ウルトラマンは少々分が悪い。

この差は、いつからついてしまったのか。

僕が子供の頃は、ウルトラマンも、仮面ライダーも同じくらいの人気であった。

ちなみに、ウルトラマンも、ライダーも、長寿シリーズであるものの、いずれもテレビ放送をしていない空白期間がたびたび存在する。

ウルトラマンのテレビシリーズは2006年の「ウルトラマンメビウス」以来、新作は映画展開が中心である。

一方の仮面ライダーは、2000年の「仮面ライダークウガ」以来、シリーズは休むことなく継続されており、この長さは、昭和シリーズを超えている。

さて、ではウルトラマンと、仮面ライダーはどういった違いがあるのか。

ウルトラマンは、M78星雲から来た宇宙人が、地球人に乗り移り（或いは、普段は地球人の姿をして）、いざ怪獣が現れた時に人間に変わり、それを討つ！ というもの。

仮面ライダーは、悪の組織ショッカーに改造人間にされた主人公が、脳改造される前に脱出し、改造された体を利用して、悪の組織と戦う。と言うのが、最初のシリーズ。

ここで争点となるのは、ヒーローそのもののキャラクター性だ。

ウルトラマンは宇宙人であり、劇中でウルトラマン自体の人格が描かれる部分はほとんどない

。

ドラマは、怪獣がどのように発生し、人間がどのように対処して行くかという所にあり、ウルトラマンは「どうしようもなくなった時」に現れるもので、ドラマの中で言うと主人公どころか、第三者となるわけである。

古代ギリシアの演劇の演出方法で「デウス・エクス・マキナ」と言うものがある。「機械仕掛けの神」という意味で、物語が解決困難な状況になった際に、絶対的な存在（神）が現れ、無理やり物語を収束させると言う手法で、我々にとって一番身近な例は「夢オチ」がそれに近い。が、ウルトラマンの役目は、まさにそれである。

ウルトラマンは、言い換えれば神なのだ。

「地球上では、3分間しか戦えない」という制約はあるものの、それ以外では様々な技を駆使して、怪獣を倒していく。

言い換えれば、ウルトラマンが出てきた時点で、ドラマは既に終わっているとみても良い。

一方の仮面ライダーは、「改造人間の悲哀」が前提としてあり、それに悩み苦しみながら戦っていく、等身大の人間である。

石ノ森章太郎の漫画版では、仮面ライダーのマスクは、改造手術を受けた際の傷を隠すため、「仮面ライダー」と言う姿は、人外の力を持ってしまった男の、悲しみの象徴として描かれる。

これがウルトラマンと徹底的に違う所で、仮面ライダーは、自身が様々な問題を背負う主人公なのだ。

とはいえ、仮面ライダーも最初は苦戦を強いられた。その悲哀が、物語を暗くし、視聴者から敬遠された。

それに加わる出演者の事故。

しかし、仮面ライダーはそこを逆手に取り、『2号ライダー』を登場させ、その際に番組の色を明るくした。

その後、仮面ライダーは人気を博し、シリーズとなっていく。

しかし、そのシリーズもマンネリが出てくると、継続が難しくなってくる。

そこで原点回帰として、より異形性を強調した「仮面ライダーアマゾン」が登場する。

この「アマゾン」は、結局数字的には失敗するのだが、著者的には、これが仮面ライダーのターニングポイントとなっている。

仮面ライダーはここで、それまでのライダー像を壊したのだ。

昆虫モチーフではない。主人公が野生児。必殺技が鋭い爪での攻撃。噛みつきなどの野性味あふれるバトルスタイル。などである。

その後もライダーは、シリーズを重ねるごとに、従来のイメージを壊し、ライダーの幅を広げ、ここまで来た。

変わらないのは、主人公にある、「悲しみ」である。

仮面ライダーは、常に「人間」として描かれてきた。

一方のウルトラマンも、シリーズを重ねるにつれ、人間の醜悪な部分なども描き、「それでも守らなければいけないのか」と葛藤する物語もあるものの、基本的に第三者であり、最後には「人間は、ウルトラマンの力を借りずに、地球を守らなければならない」と言う結論に至り、ウルトラマンのほとんどは、宇宙に帰っていく。

平成シリーズで、一部宇宙人ではない「光の巨人」と言うウルトラマンや、地球の守護神のようなウルトラマンも存在するが、結局は超越した存在であり、この辺りは、現代の差を語る上で外せないのではないかと考えている。

しかし。ウルトラマンには強みがある。

話の幅が広げやすいのだ。

仮面ライダーは、半ば連続ドラマとなっているが、ウルトラマンは、大きな筋があることもあるが、基本的には一話完結で、その中で作家は、野心的な物語をいくつも輩出している。

「途中を見ても面白い」のがウルトラマンであり、SFとしても優れている。

SFとは、つまりは比喩である。

現代の問題を、未来や、未知のテクノロジーの力を借りて、物語を作っていく。

自然、物語には、時代性が出てくる。

無論、仮面ライダーも時代を反映している。

しかし、一話完結のウルトラマンの、時代に対する姿勢は自在である。

1エピソードで傑作を挙げよと言われると、おそらくウルトラマンの方が多いと思われる。

しかし、シリーズ全体で見ると、勝敗はつけがたい。

結局のところ、現在は仮面ライダーが優勢だという事で、だからと言ってウルトラマンが元気がないわけではない。

映画もアジアを中心にヒットし、「ウルトラマン列伝」は、6クール目を超え、ウルトラシリーズの長寿番組になった。

現在は、新たなテレビシリーズに向けて充電中だと思いたい。

仮面ライダーも、平成シリーズでこれまで以上の人気を博し、映画版では、他の石ノ森キャラクターなどのオマージュも取り入れており、少々古参ファンに媚びすぎな面もあるが、そう言う話題が出てくるたびにわくわくする。

著者は、どちらも好きだが、現在はウルトラマンの新シリーズを、のんびりと待っているところである。



まぶしい光をはね返せ

一路 真実

ノストラダムスの予言が当たるかどうか毎日気にしながら生きていたら、気づいたらもう年末になっていて、世間はミレニアムだなんだと騒いでいた。予言が当たらなかったことになんかびっくりしていたところに、今度はコンピュータが二千年に対応していないという話題が出回って、もしかしたらこれが地球滅亡への最後の賭けかもしれないと思っていて、いや滅亡なんてことよりむしろこのドタバタのなかで大学受験がなくなればいいのになんて、不届きなことを考えていた。精一杯の期待と少しの不安を胸に、迎えた二千年。何も起こらない。当たり前だ。

そして、僕らは高校生最後の夏を迎えた。

端に2と0を追加したふざけた眼鏡をかけて登場した直紀は、やはり相当にふざけた大きさのプラスチックの手がついた棒で何も書かれていない黒板を指した。

「この夏は天王山だ。夏を制した者が受験を制す」

どこで買ったのか知らないが、2000のショッキングピンクの眼鏡をくいと上げた。

「中村の物まねは聞き飽きたな」

「新作ないの、新作」

担任の中村は、夏が大事だとか夏休みに遊んだやつは受験を失敗するとか、そういうプレッシャーばかりかけてくる。さすがに聞き飽きた。物まねでさえも。

日曜日の学校の誰もいない教室で受験勉強をしようと集まったわりに、なぜか物まね大会が始まっていた。直紀のせいだ。でも、ひょうきんなうえに頭の良い直紀から勉強を教えてもらわないと受験はおろか授業にさえもついていけない。少し屈辱的なことだけど。

「しかし、暑いよなあ。クーラー入れてくれないかな」

「せめて扇風機でもよかろう」

「生徒会が提案してくれないかな」

「じゃあ、俺、……脱ぐわ」

ボクサータイプのパンツ一枚になったクロに、はしゃいだ直紀が携帯のカメラを向けた。さすが直紀はカメラ付きの最新式をいち早く導入している。僕なんて電話料金が安いからとやっとピッチを買ったばかりだというのに。

クロは水泳部で鍛えた肉体を惜しげもなく披露する。本当は白井という名字だから中学時代はシロと呼んでいた。その名前に見合うような体と育ちの良い風貌だったのに、水泳部に入部してからは筋肉がめきめき成長し、今やクロと呼ぶにふさわしい脱ぎキャラとなった。

「ピンク色に豚の鼻がついたパンツって、どこで買うんだ」

笑いながら窓の外を見ると、中庭を挟んだ向こう側の校舎の廊下を篠原が女子と歩いているのが見えた。

「篠原って安田と付き合ってるの？」

そう言うと、直紀が慌ててふざけた眼鏡を投げ捨てた。本来の細いフレームに瓶底のようなレンズがついた眼鏡をかけ直し、僕を押し退けて窓際に立つ。裸のままのクロもまるで日光浴をするかのように、窓の棧に手をかけて身を乗り出した。廊下を歩く二人の姿を捉える。

「あいつ、裏切ったんだよ」

直紀は下唇を前歯でぐっと押さえ、悔しさを滲ませた。

篠原が通学方法を変えると言い出したのは先週のことだ。

「俺、明日から自転車通学にする」

授業が終わると、水泳部の練習に行ったクロを待ちながら、直紀が部長をしている将棋部の部室に勝手に入り浸り、好きなCDをかけたり漫画を読んだりして時間を潰していた。クロの部活が終わる頃には、すっかり暗くなっている。しばらく遊んだら、昇降口の施錠前には学校を出て四人でバスで帰る。そんな生活を一年ぐらい続けてきたので、篠原の宣言は青天の霹靂だった。

「ほら、俺は部活に入っていないだろ。自転車で片道二時間を通うってことをやり遂げれば、高校生活最後の思い出になるし、何となく受験も合格する気がする」

その二時間を勉強時間に充てた方がよっぽど合格に近づくわけで、篠原の言い分は全く意味不

明だったが、そのあやふやさとは正反対に決意だけは固かった。その宣言以来、篠原は一度も部室に姿を見せなかった。

「自転車通学とたまり場に来ないことは別問題だろ？」

と、僕たちに部室を使わせてくれた直紀は憤慨した。

「人の気も知らないで」

そもそも将棋部の部室は物置となっていて、それを有効利用しようと言い出したのは篠原だった。部外の間が勝手に使うのを嫌がって、最後まで拒んだのは直紀だったけれど、部員に白い目で見られながらも最終的にみんなが狭い部室にひしめき合うのを一番楽しんでいたのも直紀だった。

「裏切ったって？」

クロがまぶしそうに目を細めて直紀を見た。引き締まった体が黒光りする。

「篠原がバス通学をやめたのは、自転車通学の安田と一緒に帰るためだったんだよ」

「安田って自転車通学だっけ。直紀、何でも詳しいな」

女子がどうやって学校に通っているかなんて、受験に不要な科目のようにまるで頭から抜け落ちていた情報だった。僕の何気ない一言に、直紀が「詳しくなんかないよ」と怒ったような声を出したから、思わず後ろにのけぞって柱に頭をぶつけてしまった。

僕を心配するでもなく、直紀が閃いたように大きな声を出した。

「あいつら、視聴覚室から出てきたんだ」

視聴覚室は外から見えないようにいつもカーテンがひかれている。だから、中に入ると心なしかひんやりする。映像を見るために使用される部屋だから、壁は防音だ。

直紀は突然取り乱して、「行くぞ！」と言ったが、裸のクロが慌てて立ちふさがった。

「行って何するんだよ」

「二人が視聴覚室で何してたか問いつめるんだ」

「何の意味があるんだよ」

「だって、俺たちは裏切られたんだぞ。二人がどういう関係か知る権利があるだろ」

視聴覚室で二人きりになった男女が何をしていたのか。それはもちろん気になるけど、それと僕たちを無理矢理結びつけないでほしかった。僕たちは裏切られたのか？ いやそんなことはない。たぶん、直紀は安田のことが好きなんだ。頑固だから死んでも認めないだろうけど。

次の日から、直紀はこれ見よがしに篠原のところへ行って安田とのことを聞き始めた。

「篠原、昨日学校で何やってたんだよ」

でもその言い方は怒っているというよりは、いつものようにおちゃらけた、どちらかといえばからかうような言い方だった。

「見てたのかよ」

篠原は驚いた表情をしたが、口元はにやけていた。

「なあ、教えてよ。……視聴覚室にいたんだろ？」

「知らねえよ」

篠原は笑いながらそう言った。僕は、ちょうど教室に入ってきた安田を目で追った。安田は肩まであるストレートの髪を耳にかけて、友達のノートをのぞき込んだ。白いブラウスからわかる乳房は他の生徒よりも発達していて、その少しかがんだ姿勢からは胸元の白いレースの下着が微かに見える。思わず目をそらした。

日曜日の午後。誰もいない学校の視聴覚室で二人きり。僕は頭の中で、安田とその場所に立っていた。安田が僕に近づく。ねえ。どうするの。わずか数センチで触れてしまう距離に立ち、僕を上目遣いで見る。彼女のブラウスから白いレースの下着が、

「翔」

クロが呼びかけたので、僕は良いところで思考停止させられた。

「今日の夜、あけといて」

クロは口を横に広げると、白くて小さな歯を全部見せた。

クロは定期試験前で部活が休みらしい。日がとっぷり暮れた頃、一緒に勉強していたクロが突然立ち上がって教室を出た。僕はその後を親にまわりつく子どものようについて行った。

向かった先は、夜のプールサイドだった。遠くの方でぼんやり光る正門のライトがわずかに見えるだけで、ほとんど真っ暗なプールサイドはひっそりとして少し不気味にさえ思えた。

ぴちゃんという音がして、水面が揺れていることがわかると、音の先に人がいることに気づいた。プールサイドに腰掛けて、ぴんと伸ばしたほっそりした足が水面をふるわせている。

「さいちゃん」

声に反応して立ち上がったのは、ライトが当たっていなくても暗がりでもうすら光りそうなほど色の白い女性だった。

「水泳部の副顧問なんだ。こいつ、坂下。俺の親友」

クロはぶっきらぼうにお互いを紹介した。

その人は斎藤さんと言って、高校の事務員だった。教師の手が足りず、新しく水泳部の副顧問になったらしい。後からクロに聞いたのだが、二十九歳の独身。丸みを帯びたボブカットはその年齢からはずいぶんと若いように見えた。

クロは誰とでもすぐ仲良くなる。それはおそらくクロの幼いときから訓練された能力だ。クロは有名な資産家の一人息子で、近所はほとんどクロの家の土地だった。嫌でも社交パーティーに付き合わされ、小さい頃から自然と大人の中で育ってきたクロは、何も言わなくても生きる術を心得ている。クロの家が代々経営している白井不動産から借りたアパートに、母親と二人で住んでいる僕なんかとは、本当は住む世界が違うんだ。

夏の大会が終われば水泳部は引退となる。定期試験前は部活を休みにしないと決まりだが、クロは服を脱ぐとプールに飛び込んで泳ぎ始めた。

僕もプールサイドに座り込んだ。

「斎藤先生」

呼びかけると、顔を半分隠していた髪をかきあげて、僕をちらっと見ると、

「私は先生じゃないのよ」

と口の端を少し上げた。

慌てて、言い直した。

「斎藤さん、こんなことして怒られないんですか？」

「怒られるかもね。でも、そんなのは関係ないわ。泳ぎたいときに泳がないと後悔するもの。それに……」

こみ上げるおかしさを振り払うように言葉を遮って、くすつと笑った。僕は心の中でその後を継ぎ足した。

(それに、先生じゃないし。)

ワンピースの裾を太股の中程までまくり上げ、今度は両足ともにプールにつけた。片足ごと膝が艶めかしく動くと、水面に小さく泡が立つ。僕の張り付いた視線に気づくと、斎藤さんはまた

ふふっと笑った。僕は思わず喉を鳴らした。

生温かい風がぐるぐると円を描くように吹きつけ、校内の木が誰かの噂をするようにどよめいている。夏ってこんなに風が強かったかなと思った。いや、台風が近付いてきているのだ。だけど、太陽は肌を焼きつくすように照りつけ、この後の荒れ模様など想像ができないくらいに晴れている。

食堂に行く渡り廊下で、一人で歩いてくる安田とすれ違った。隣にいる直紀を見ると、少し眉間に皺をよせて足早に通り過ぎた。

「篠原がついにばらしたんだよ」

「こないだの日曜日のこと？」

「そう」と言って、直紀は小声で耳打ちした。

「視聴覚室でやったらしいよ。床に柔道着敷いて」

「マジ？」

いつもの学校の何の変哲もない教室や物が、急に生々しく想像力をかき立てるアイテムへと変身する。

「しかも、あの時が初めてじゃないらしい。篠原、ほぼ毎日帰りに安田の家に行ってるって」

「親はいないの？」

「安田の家は母親しかいなくて、昼も夜も働き詰めらしい。あいつらやりまくってるんだ」

「さすが、情報通」

そう平然を装ったが、考えないようにしても頭の中で安田が服を脱いでいくのを止められない。硬い床に敷かれたがさがさした質感の柔道着が、安田の柔らかい肌に擦れるところを想像する。聞かなきゃよかったと思った。直紀が呟いた。

「聞かなきゃよかったよ」

それはこっちの台詞だ。でも、直紀の怒ったような泣きたいような複雑な表情を見ると、責めることもできない。

「お前、安田のこと好きだろ」

直紀はむっとした声で反論した。

「好きじゃない」

やはり死んでも認めない。

「ただ、俺は二人に幻滅してるだけ。そんなの、不純異性交遊だし。安田は気付いてるみたいだけどね。篠原が俺にばらしたってこと」

「安田って最近女子ともつるんでないよな」

「誰にも相談できないんじゃないの？ やりまくってるってことを彼氏がクラスの男子にばらしたなんてさ」

確かにな、と思った。

「自業自得だろ」

直紀は突き放すような発言をして鼻で笑ったが、小さな溜息をつくと考え込むように視線を床に落とした。

水泳部の練習が終わる頃、昇降口に向かうとクロと斎藤さんを目撃した。慌てて教室へ引き返

そうとしたが、クロの洞察力をなめてはいけない。すぐに見つかって呼び止められた。近付いてくるクロの背後で、斎藤さんがもう少し二人で話していたかっただけのようにがっかりした目をしたような気がした。

「俺、教室で待ってるよ」

「いや、大丈夫。ね、さいちゃん」

同意を促すクロに、斎藤さんは笑顔で肯いた。

「今度の大会、頑張らないと承知しないぞって話よね」

透き通るような少し高めの声でそう言うと、斎藤さんは肩を揉むようにクロにそっと触れた。そして、僕に小さく手を振ると、行ってしまった。斎藤さんの姿が見えなくなると、クロは僕に向かって苦笑いした。

「俺、期待されるの慣れてるから」

斎藤さんは部活が休みの日もクロのために学校のプールをこっそり開けたり、休日に市民プールに見に来たりすることもあるそうだ。昔から教師になることが夢で、それを諦めても教育現場に関わりたいとアルバイトの形で事務員になったのだ、とクロが教えてくれた。しかし、思い描いていた教師の夢と現実の仕事のギャップを埋められず、結局はクロを熱心に指導することで心のバランスを取っているようだった。

「俺はさいちゃんのために勝たなくてはいけない」

開襟シャツの隙間から、鍛えられた胸筋の盛り上がりが見える。良質な弾力の下には強い心臓がある。

「やっぱりクロは俺なんかとは全然違うな。誰かの生きる意味になってる」

クロは転がっていた小石を軽く蹴った。

「さいちゃんは、うまくいかない自分の人生を消化するために俺を指導しているだけだよ。俺のためじゃなくて、全部自分のためなんだ」

クロに関わる人々の多さが、彼の肉体に負荷をかけ、あの強靱な体を作り上げている。きっと負荷の質や量が僕とは違うのだと思った。クロの心臓はいつだって激しく動き続けている。

その日は、今思えば朝からおかしかった。いつもは何も言わない母親が急に怒鳴り出して、「毎日遊んでばかりいないで勉強しろ」と言ったかと思ったら、「あんたを大学に行かせるお金なんかない」と言い、最終的には「白井さんと仲良くして資産家になる努力をしろ」と言って、はっきり言って支離滅裂だった。こういう物言いは女性特有のものなんだろうと頭の隅で思ったのだが、あまりにいらいらして、

「あんた、プライドないのかよ！俺がこうなったのはあんたのせいだろ！」

と思わず怒鳴り返してしまった。すると、さらにヒステリックに「母親をあんたなんて呼んで！」と論点をずらすという卑怯な技で応酬してきたから、すぐに家を飛び出した。バス停までの道程で、早くも後悔した。僕はこの暮らしを不満足に思ったことなんてない。母子家庭の自分を不幸だなんて思ったことなんてなかったのに。何であんなことを言ってしまったんだろう、と。

昼休みに、事務室の前を通った時にこっそり中を覗いた。斎藤さんは事務室内にいた五十代ぐらいのおじさんと楽しそうに話していた。すると突然、おじさんはさりげなく、誰にも気づかれないような角度で斎藤さんの背中を下から上へそっとなぞっていった。その指の動きで、着ていたブラウスに少しでも皺が寄る。斎藤さんは嫌がらない。顔を上げておじさんを見る。その目は子犬が飼い主を見るように優しい忠誠心で満ち溢れていた。僕は一瞬で二人のただならぬ関係を感じ取った。

何だか嫌な気持ちで授業を受けていたら、直紀が小さく丸めた紙を投げてきた。開くと、「放課後、将棋部の部室に來い」と書いてあった。

篠原がたまり場に來なくなってから、放課後に部室に集まるという習慣は自然消滅した。久しぶりに訪れる将棋部の部室は、もうすでに電気が点いていて、直紀が先に來ているのだと思った。

驚かすつもりで思い切りドアを開けると、

「きゃっ」

中にいる人がそう叫んで振り返った。さらさらの長い髪が揺れた。

「え、何で安田がいるの？」

「坂下くんに相談したいことがあって、部室を貸してもらったの」

「俺に？」

安田は、二人きりなんて緊張するねと言いながら、胸に手をあてた。その膨らみをあえて見ないように注意していると、

「言えるまで少し違う話してもいいかな」

と言って、昨日見たテレビ番組の話や教師の話、好きな漫画の話など他愛もない話を始めた。狭い部室の中で、パイプ椅子に座り、長机を挟んで話しこんだ。僕が置いていった洋楽のCDをかけてどの曲が良いか説明していると、安田は嬉しそうに僕を覗きこんできた。顔が近付くと、嫌でも頭の中に柔道着がちらついて、思わず体を引いた。

いつの間にか外は真っ暗になっていて、昇降口の閉まる時間が近付いていた。

「そろそろ話し始めないと、昇降口が閉まったら下靴に履き替えられなくなるよ」

安田は肯いたけれど、何も言わないまま部室の窓を開けて外を眺めた。少し身を乗り出す。スカートが尻の膨らみの方へとずり上がっていく。太股の裏側に小さなほくろを見つけたとき、僕は何か誰も知らない安田の秘密を見てしまったような気がした。きっと安田も知らない。もしかすると篠原だって知らないかもしれない。僕だけが知っている安田の姿のような気がして、胸の鼓動が激しくなった。

安田は窓を閉めて振り返り、「もう少し」と言った。昇降口の閉まる三分前になっても、まだ話を始めない。僕は痺れを切らしてしまった。

「もう話さないなら、俺帰るよ」

立ち上がろうとした時、安田が突然腕を掴んだ。

「待って、行かないで」

ぎゅっと握られた女子の小さくて冷たい手の感触に戸惑っていると、

「私、母子家庭で家にお母さんしかいないの」

と真剣な目を向けて話し始めた。

時計の針が昇降口の閉まる時間を過ぎた頃から、何だかもうどうでもよくなって、次は終バスの時間を考えていた。

安田の話は、つまるところこういうことだ。母子家庭で母親は働き詰めでほとんど家にいないけれど、しつ前は厳しく門限を守らないとぶたれることもある。そこから逃げ出したいと思っていた時に、篠原から告白されて付き合うようになった。あまりにも体ばかりを求めてくる篠原に嫌気がさしている。しかも二人だけの秘密だった、視聴覚室での密会まで直紀に話してしまう篠原に失望している、と。まあ、そんな感じだった。

安田の言い分もわかったし、思春期の男子として篠原の気持ちは痛いほど分かる。むしろ羨ましくさえある。ただ、僕に相談されても困ると思った。安田の真剣な目は、安田の存在すべてが僕にかかっているような気にさせて、何だか恐ろしいもののよう思えた。

しかし、ここで興味のない振りをするのは、女性をよりヒステリックな状態にすると母親から十分に学んでいるから、どんな話をされても聞き流して丸くおさめようと思った。

「篠原は良い奴だよ。安田のことが好きすぎて、今ちょっと変な状態になってるだけだよ」

安田は少し不満そうに口をつぐんだ。何も言わずに立ち上がると、机の周りをゆっくり歩いて僕へ近付いた。隣に腰掛けて両手をかぶせるように握った。

「坂下くんなら分かるでしょ、私の気持ち。……もう、家に帰りたくないの」

心の中で突風が吹いたような気がした。突然、窓の外の雨の音が勢いよく耳に飛び込んできた。いつから降り始めたのだろう。その雨は少し前からその調子で窓を叩いていたのかもしれないけれど、僕にはこの瞬間に世界が見えたかのように、強くいろんな音が入ってきた。激しく降りつける雨粒のように、僕の腕にぷつぷつした湿疹のようなものが一気に浮かんできた。

朝思ったことをもう一度強く意識したのだ。僕の家は母子家庭だ。だけどそれを一度も不幸だと思ったことはない。誰かが僕の暮らしや、僕自身を惨めに見ていたとしても、僕は僕なんだ。僕は惨めなんかじゃないし、僕は全てを母親のせいや育った家のせいになんてしたくない――。

そう思うと、頭の中に一気に血が上って、安田の顔がぐらぐら揺れているように見えた。口から言葉が溢れだした。

「安田の言ってることも、状況も分かったし、同情だってする。でも、俺と安田は同じじゃない」

ぽかんとしている安田の手を振り払った。

「俺は家に帰る」

部室を飛び出した時、突然人にぶつかった。僕は走り出していて、よく見えなかったけれど、おそらく直紀だった。どしゃぶりの家路を上履きのまま走る。走りながらずっと安田のことを考えていた。安田は僕に何を求めているのだろう。母親や貧乏な家庭以上に僕に何を背負わせようというのだろうか。薄い布切れはすぐに浸水され、足を踏みしめる度にぐちゃぐちゃと音が鳴った。

学校になんて行きたくないと思った。朝なんて来るな、とどんなに念じてもいつもときっかり同じ時間に目覚まし時計がけたたましく叫び、朝が来る。昨日あんなに雨が降ったのだから、せめて今日もどんよりした曇り空であってくれたら自然と学校に行つてやるかという気持ちにもなれたのに。そう思っても心とは mismatch の夏らしい快晴の空が広がっている。そんなものなのだ。思っているとおりには物事は進まない。

安田と顔を合わせるのが辛い。そう思っていたら、彼女は欠席だった。昨日あの後家に帰ったのだろうか少し気になった。

昼休み、人気のない中庭の脇に直紀を呼び出した。昨日のことを聞くためだ。

直紀を待っていると、小さな話声が聞こえる。校舎の壁の裏側に人がいるようで、僕は息をひそめて壁際に耳を寄せた。聞き覚えのある声だ。斎藤さんとクロだ、と思った。

「これ、お守りだから」

大会に向けて、斎藤さんが手作りのお守りを渡しているようだった。

「ありがとう」

クロは照れたような言い方をした。心臓の鼓動が速まり、僕はすごく悪いことをしているような気がしてきた。

「さいちゃんは、今でもあいつのことが好きなの？」

「また、からかうんでしょ」

「そういう恋愛、もうやめなよ」

僕は自然と頭の中で、あのおじさんと斎藤さんの姿を重ねていた。斎藤さんは明るく言った。

「白井くんが大会で頑張ったら、私も前に進める気がする」

クロはその言葉に対して何も言わなかった。自然と話題が変わると、二人の小さな笑い声がし始める。

その時、ようやく直紀が現れた。クロたちに気付かれないように場所を移すと、直紀に訊ねた。

「お前、昨日将棋部の部室の前で俺とぶつかったよな？」

直紀は何も答えなかった。目を合わせようとさえしない。

「安田ってあの後ちゃんと帰った？」

直紀は下を向いたまま、口を開かなかった。

「直紀」

「やめてくれよ」

肩に触れると、強い力で振り払われた。

クロが一人で通りかかり、僕たちのいつもと違う雰囲気を感じたのか、割り込んできた。

「お前ら、何の話してんの？」

それを無視して、直紀は吐き捨てるように言った。

「安田は翔に助けを求めてたのに、何で置いて逃げたんだよ」

「別に、逃げてなんかないよ。大体、何で俺なんだよ。直紀が話を聞けば良かったじゃないか」

「俺が聞けるならそうしたかったよ」

僕は直紀の方を見つめていたけど、直紀は視線を落とし、目を合わせないまま話を続けた。

「お前が走って逃げたから、俺はあの後すぐ部室に入ったんだ。安田はぼろぼろ泣きじゃくってた。だけど、言われたんだ。俺じゃだめなんだって。翔じゃなきゃ、理解し合えないんだって」

「安田が俺に何を期待しているか知らないけど、俺は安田とは違う」

その時、クロが言った。

「直紀は安田のことが好きなら、篠原とのことをからかうんじゃないかって、お前が話を聞いてやるべきだったんじゃないか？」

僕の肩を持つようにするクロに対して、直紀はじろりとにらんだ。

「クロは何も分かってない。安田が求めていたのが篠原だと分かったとき、俺じゃなかったって苦しかった。将棋部の部室を貸してと言われた時、俺に助けを求めてると思ったよ。そしたら、今度は翔だ。俺と翔と何が違うって言うんだよ。生まれた境遇が違えば分かりあえないなんて、俺にはもうどうしようもできないじゃないか。自分の努力じゃもう越えられない壁なんだよ」

直紀は激しく拳を震わせながら言った。

「翔は責任を取りたくないだけだろ。ただ、安田のことを重荷に思ったから逃げたんだ」

痛いところを突かれた。僕と安田が母子家庭でつながっているなんてそんなのおかしいと思っただけけど、実際は安田が家に帰らないのを手助けするほどの重荷を背負えなくて、無責任に逃げたのだと気づいた。安田の全てが僕にのしかかるのが怖かったんだ。何も言えない僕をかばってクロが言った。

「直紀はいつもそうだ。自分が向きあわなくて、他人のせいばかりすんじゃないよ」

「クロには俺の気持ちなんて分からないよ。クロはあの副顧問とべったりじゃないか。俺は誰にも求められない。誰も俺のことなんか相手にしてくれない」

すると、今度はクロが今にも直紀に殴りかかりそうな勢いで言った。

「さいちゃんと俺の関係の何が分かるって言うんだよ。直紀は自分を卑下して、無いものねだりしているだけじゃないか」

血が頭に集中して、周りが揺れ始めた。直紀とクロの言い合いを見ながら、届くか分からない声を必死に振り絞った。

「……俺は、直紀みたいに面白くて頭の良い奴じゃない。クロみたいに家が金持ちで水泳のスキルがあるわけでもない。俺なんて何やっても普通で、何やっても人並みだよ。誰にも期待なんてされないし、俺自身だって期待もしてない」

息を吸い込んだ。何だか鼻から鉄錆のような匂いが抜ける。

「母子家庭で貧乏で、本当は進学なんてせずに働いた方がいいってことも分かってる。だけど、その境遇を同情されるのだけは嫌だ。俺は安田とは違って、この境遇を否定も肯定もしてない。だって、これが俺なんだから。空気とか道とか川とか、そんなのと同じ。もう気付いた時からそこにあって、それが俺そのものなんだよ。そういうことの責任は誰かに委ねるもんじゃないだろ？」

直紀はうつむいたまま黙って聞いていた。

「正直言って、俺なんかより二人の生まれた環境の方が良いに決まってる。本当は羨ましいよ。

俺だって俺を否定しないために必死なんだよ」

言葉が詰まった。思わず、目から涙が出そうになって口を強く結んだ。すると、クロが言った。

「俺だって、好き好んで俺になったわけじゃない」

仁王立ちになって、クロは自分の片腕の筋肉を確かめるようにぐっと掴んだ。

「小さいときから期待されて、だからみんなの反対することばかりやってきた。高校だって親から勧められたところには行かなかった。部活だって本当はやるなって言われた。だけど、無視して水泳を始めたら、思ったより良い成績が出て、そしたら手のひらを返したように周りがいきなり部活のことを認めて期待し始めた。みんな勝手なんだ。でも、期待されたら俺も頑張っちゃうんだよ。条件反射なんだ。期待されることがこんなに息苦しいと思ってるのに」

クロがこんなに自分のことを語るのを初めて見た。荒げる息をぐっと吸い込んで、クロは口を開いた。

「さいちゃんだって、俺に期待をかけてるのは単なる逃げだよ。別に俺の才能を本気で信じてるわけじゃない。さいちゃんは、仕事もそうだけど、うまくいかない恋愛からも逃げて、俺を何かの代わりにしてるだけなんだ。俺だってもっと生まれるのが早かったら、出会うのがもっと早かったら、さいちゃんが俺のことを恋愛対象として見てくれたかもしれない。こんな単なる暇つぶしみたいな関係じゃなくて。でも、全部仮定で、全部無いものねだりなんだ……」

そう言うと、突然クロが腕を目にあて、鼻をすすり始めた。僕も直紀も、責任感が強くていつも僕たちのことを守ってくれていた強いクロがそんなふう泣くのを見たのはおそらく初めてで、少し面食らってしまった。斎藤さんの気持ちや家を継ぐ者としての期待を一身に背負うクロがずっと輝いて見えていたのに、その重さが僕には全然分かっていなかったということにようやく気づいた。声を押し殺して泣くクロは、長い間いろいろな人からかけ続けられた期待をはねのけることなく我慢してきた思いが溢れたようだった。

しかし、僕たちはその後の修復方法を知らなかった。交わらない思いをぶつけあっただけで、喧嘩した、というのとは少し違う。これまで自分の思いを隠したまま付き合ってきて、本当の思いを伝え合っただけでこなかったのだ。だからうまく喧嘩すらできなくて、ただ平行線の言い合いに終わってしまった。だけど、これからお互いの話を掘り下げたところで、変に気をつかって話せないということも分かっている、僕たちはもう互いに積極的に関わることをやめてしまった。そして、そのまま夏休みに入った。

その日、朝早く目が覚めた。することもなくぼんやりとテレビを見ていると、電話が鳴った。齋藤さんからだった。

「今日、白井くんの大会の日だよ。坂下くんは応援に行くよね？」

僕の体は今日がクロの大事な日だってことを覚えていて、だから朝早く目が覚めたのだ。でも、覚えていることと行動することは違う。

「いえ、行きません」

お互いに深い溝にはまってしまい、そこから抜け出せないままだった。受話器を通した齋藤さんの声がざわめきに時折消えてしまう。

「私も行けないの」

発車のベルのような音がする。

「私ね、みんなが夏休みに入ってすぐ、学校辞めたの。実家に帰って、結婚でもしようかなって思っ」

僕は想像した。齋藤さんがホームから僕に電話をしている様子を。夏休みの間にひっそりと仕事を辞めたにも関わらず、こうして僕に電話をしてきている。きっと誰かに話を聞いてほしかったんだ。それぐらい齋藤さんは孤独のなかで生きていたんだ、と思った。そして、その齋藤さんに期待をかけられて、海原に両手を広げて飛び込んで行くクロのことを想像した。

齋藤さんが息をのみ込む音が聞こえたような気がした。少しの沈黙の後、溜息といっしょにこう吐き出した。

「年をとると、いつの間にか他の人ばかりを気にするようになって、自分の人生が後回しになってたのかもしれない」

そして、もう一度ベルが鳴った。

「聞いてくれて、ありがとう」

電話を切ると、僕は自転車に飛び乗り、がむしゃらに走った。

土手の陸橋を通る特急電車に齋藤さんが乗っているのだと、なぜだか分からないけどそう思った。立ちこぎしながら、朝の高い陽が差す陸橋を特急電車が通るときに叫んだ。

「齋藤さん！」

精一杯、自転車のペダルを前に押した。土手に生える草の朝露や川の水面が朝陽を反射してきらきらと光る。陸橋も、特急電車の外面の金属も、全てが朝陽に負けまいと力いっぱい光をはね返している。

「齋藤さん、もう誰かのなかで生きるのはやめてください。自分の人生を生きてください」

大きな声で叫んだ。力強い風が口いっぱいに入って来る。それでも僕は齋藤さんの名前を叫び続けた。そして、特急電車が見えなくなると、そのまま全速力でクロが泳ぐ大会のプールへ向かった。

それから十年以上過ぎて、僕たちはあの頃の齋藤さんと同じ二十九歳になった。あの高校時代以来、もう全員が一緒につるむことはなかった。みんなばらばらの大学に進学して、直紀とクロは地元を離れた。地元に残った篠原とは、全く連絡を取り合っていない。偶然会った知り合い

から、病気で長く入院しているという話を聞いたが、その後のことはよく知らない。頭の良かった直紀は、同じ大学で知り合った彼女と卒業後すぐに結婚して、一児の父親になったと聞いた。でも、一度も地元に戻らないから、奥さんとも子どもとも会ったことはない。クロとは、帰省する度に呼び出されて飲んでいたけれど、それもいつの間にか数年に一度くらいのペースになってしまった。クロは白井不動産を継がず、別の会社に就職した。本人は否定したけれど、僕にはわかっている。家を継ぐための自己研さんをしているに過ぎないのだ。クロは最終的には期待に応える。そういう人間だ。

そして僕は、地元の大学に進学して、そのまま地元の小さな会社に就職した。身の丈に合った人生だ。

この年になって気づいた。きっと斎藤さんは本気で僕たちに期待なんてしていなかったんじゃないかな、と。あの時、僕たちは自分の力で何かが変わると本気で思っていた。危うい自己意識の上に立っていながら、無責任なくせに大人ぶった行動ばかりする。どちらにも進めない、単なる成長過程の人間だ。そんな奴らに何を期待するのだろうか、と今は思う。

ただ、いまだに朝のきらめきを見ると、胸が締め付けられる。自分が輝けないなら、せめて輝く他の光をはね返す人でなくてはいけない。はね返してでも自分で輝く努力をしなければならないのだ。何もせずに誰かに期待するのではなく、自分で光をはね返す力が必要だと感じる。

そんな時、必ず思う。

僕たちは、ちゃんとあの時代に生きていたんだな、と。

(終)

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまさぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人
にとって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりで考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

おまけ短歌／しろくま

おまけ短歌 しろくま

透明に色を溶かした手に入る誰かだったら嫌いになれた

はつ夏の短編集よ傾いて当直室の本棚に立つ

さっきから何しているの？ Fキーに触れれば海のおいが満ちる

適切な温度を保つ絶滅種リストを抱いて眠りにつこう

一斉に光る階段 神様が見えても消えても全て間違い

真夜中の本屋の灯りはじめての世界を語る言葉のように

海沿いを車流れる初夏のしろくまみたいに不機嫌なかお

駅までは黙って歩くあなたって誰のものでもないふりをして

楽にしてくださいあなたにぴったりの靴下を編む四角い五月

王様の沈黙みたいな真夜中になにもないからなにもないから